

池窪弘務作品集 2 戯曲 2

[ホームに戻る](#)

目次 リンクをクリックして下さい。

[作品 1](#)

瓶の中

京都・スペース・イサン東福寺（2000年）

[作品 2](#)

失われた時間

星と泉 18号（2015年）

[作品 3](#)

回路

作品 1 瓶の中 [目次へ](#)

登場人物

優^{ゆう}

亘^{わたる}

明^{あした}
日

真^ま
由^ゆ

み^み
ゆ^ゆ

男
(先生)

一 開幕前

舞台と客席を分離しない。客席も含めて、一つの世界であり、体験である。連続する空間と時間。下手半分の真つ暗な舞台（ここで演じられるのは、主に真由の夢である）。

闇は観客の想像の場になる。科白はよどみなく喋るのではなく、動作も、緩急をつける。能の舞台のように、ゆつくりと表現する。劇が動く時は激しく。小道具を使う所作は全てふりで。ただし能面は用意する。闇の中で何かが動く気配がする。数分前から（予定された開幕前の時刻から）、すでに芝居は始まっている。開幕ベルはならない。

真由（闇の中で、独り言のように）ここからは、どこにも行けない、でも、ここはすべての場所につながっている。私が眠れば誰かがやってくる。

テーマ曲「ふれあい」が小さく流れ始める。舞台が明るくなる。

ふれあい

知らない場所に

知らない私がいる

知らない時間の中に私がいる

ふれあうことの出来ない私がいる

年老いた私がいる

ふれあうことの出来ない私がいる

夜汽車の窓にもう一人の私がいる

あなたは何処へ行くの

あなたは何処から来たの

二 鏡の間・真由の夢・優の部屋

舞台中央奥に鏡がある。枠だけでよい。鏡を境に

異なった

亘・優

場所を示す。亘の世界。優の世界。二つの位置は適時入れ替わる。瓶のイメージの舞台装置が一つ。他は何もいらぬ。舞台は3つの世界（亘、優、真由の夢）が交錯するように進む。鏡は真由の夢に入る扉になる。真由は鏡の中に。優は下手。

亘 （上手から歩きながら）歯ブラシがない。どこにいったんだろう。

真由 変なものが落ちているわ。

（歯ブラシを拾い上げる）何だろう。うふっ、おかしいな形。

亘 仕方ないか。（口を濯ぐ）。今日も雨かな。

下手に、優が、横になっている。所在なさそうに、髪の毛を弄んでいる。亘、鏡の前にたつ。

真由 大きな鏡。

亘 鏡の間。

真由 鏡の間？

亘 能役者が、鏡に向かい、面を着け、役に変身する。(面を着ける動作。一時、舞う)。いつも鏡の向こうにもう一人の俺がいる。(間)。どれだけ沢山の人間がこの役を演じたのだろう。みんな死んじゃって……。鏡の中の俺。俺は何百年も前から、鏡の中にいたような。(ふっと気づいたように)誰だ、君は？

真由 私は真由。瓶の中にいるの。生まれた時からずっと。時々瓶の外から私を見る人がいる。真由、元気かい、随分大きくなったじゃないか。だけどこのごろは誰も来ないなあ。

亘 ずっと一人なの。

真由 ^{みゆー}μ 真由一人じゃないわ、μがいる。

亘 ^{みゆー}μ？

真由 スイッチを押すと何でも答えてくれる。

亘 今日は変な日だなあ。歯ブラシ立てから歯ブラ

シが消えたし。歯ブラシは何処にも行かないはずだ。僕が右手で歯ブラシ立てから取って、歯を磨いたら、その手で歯ブラシ立てに戻すんだから。

真由 何を言っているの。ちつとも分からない。

亘 君は何処にいるの。僕には見えない。でも、誰かがいるのが分かる。

真由 私には見えるよ。君と、もう一人の君。

亘 もう一人の僕？

真由 その子の名前は優。

亘 優。女？ 男？

真由 女の子だよ。お互い知らないだけ。亘は男。

優は女。そっくりなのに逆さまなんだ。鏡の中の君のようにね。右手を挙げれば、

亘、鏡に向かい右手を挙げる。

真由 鏡の中の君は左手を挙げる。そっくりなのに逆さまなんだ。こちらに來ない。

亘 來ないかって言われても、。

真由 鏡の中。亘は、そこから來れるわ。優は水の

中から。あの子はマリモになってやって来る。あたしの夢の中に。

亘 君の夢の中に？

真由 うん。私の夢の中で、優と亘は出会うんだよ。

亘 駄目だよ、能の稽古があるんだ。

真由 大丈夫、時間は止まるわ。優に会えるよ。も

う一人の君に。

亘、誘われるように鏡の中に入っていく。亘が消える。同時に、優が立ち上がる。ドアを開けるマイム。ハットをかぶりトレンチコートを着た男が入ってくる。

優（明るく）お帰り。疲れたでしょ。（ドアを閉める）。

男の手が何かを差し出す。

優 えっ、おみやげ、うれしい。

男 預かって欲しい。

優 なあんだ、お土産じゃなかったの。なあーにこれ。

男 マリモ。

優 北海道に出張だったの。(小瓶に入ったマリモを受け取る)。マリモ……。

男 真由の夢の中で買った。

優 真由？

男 少女の名前さ。

優 その子の夢の中で。

男 僕は絹の服を買いに行ったんだよ。誕生日のプレゼントに。だけど売ってくれなかった。だから、マリモを買った。

優 お客さんは、女の子の夢の中に入っていけるの？

男 一度だけだよ。もう二度と入れない。君なら行けるかもしれないね。

優 行ってみてもいいなあ。私の夢はいつも悲しいから。

男 帰るよ。誰にも言えない話を聞いてくれてありがとう。

優 また、おいで。

男 うん。握手はなしだね。

優 ごめんね。

男、立ち上がる。

優（明るく）行ってらっしゃい。（ドアを開ける）。

手を振って見送る。簡単なお客、これでお終いなんだ。

窓を開けて、外を見る

優 また、雨か。そういえば梅雨なんだなあ。結構降ってる。今日は誰も来ないなあ。給料日前の雨の日なんだから。

両膝を抱えて寝転がる。

優 そういうわけでマリモはこの部屋にいます。

水はエビアンでなんて、結構贅沢だ。生きている

のかなこいつ、死んでいるのかなあこいつ。けど、なぜマリモなんか預けに来たんだろう。

優、目を閉じる。

優　私は瓶の中に沈んでいく。すごく気持ちがいい。みーんな水にゆだねて安心なの。私はマリモ。光がすーと消える。ここは何処だろう、目の見えない私は考える。お母さんのお腹の中だ。子宮……。お母さんの血管の中を流れる血の音。お母さんの大きな鼓動、それに合わせる私の小さな、小さな鼓動。私はまた、ずっと浮いていく。細かいあぶくが私を包む。いくつもの偶然が重なって、私はいる。私って不思議だなあ。私は本当に一人なの。他にも、私はいるのかもしれない。小さな光が見えるわ。吸い込まれていくような。

暗転。

優　ここは何処。眠い、すごく眠い。

優は体をまーるく、まーるくする。優の身体にマリモをイメージするライトが当たる。優は真由の夢の中にいる。気持ちよさそうに眠っている。亘は真由の夢の中にいる。

空中に浮かぶ瓶を眺めている。下手に名付けられる前の明日あした（男でも、女でも可）。

亘　ここはどこだ。（歯ブラシを拾い上げる）歯ブラシがあつた。こんな所に来ていたのか。

優が起きる。

優・亘　（同時に）お前は（亘）、あなた（優）は誰？

亘　君から言えよ。

優　優

亘 亘

明日 そっくりだね、二人。鏡の中と外みたいに。

優 ぜーん、ぜーん、似てなんかいないわ。亘どっ

ちが虚像で、どっちが実像なんだよ。それに、

優 それに（亘の科白「それに」に被せる）、あんた
は誰？。

優と亘は顔を見合わせる。

明日 名前なんてないよ。僕は真由を目覚めさせるために送り込まれた小さな意識なんだ。分かる？

亘 分からない。

明日 葉。

亘 葉。

優 葉か、おもしろいわ。

明日 作用が終わったら消えてしまう。

亘 役目が終わったら、消える。

明日 （少し強く）役目なんて僕には関係ない。ただ働きかけて、そして、消えて行くんだ。

優 葉君（さん）に聞きたいな。ここは何処。

明日 真由という少女の夢の中。

亘 夢の中。

明日 そう、ここは真由の夢なんだ。真由について話そうか、聞きたくなければ別にいいけど。

亘 俺は帰るよ、たぶん悪い夢でも見ているんだろ
うから。

優 私も。

明日 そっくりだね、二人。夢の中にいるんだから、
君たちも夢なんだよ。ここには現実なんて何もな
い。

亘、優、舞台を歩き回る。空中に手を流す。

明日 何もない。いくら歩いても同じさ。瓶の中さ。
瓶の中に閉じこめられた昆虫のように、向こうの
世界は見えているのに出られない。

亘 俺がいるよ。また、叱られている。覚えられな
いだよ。頭悪いから。

優 あれは？

亘 能の舞台。

優 ……。

亘 能を知らないの？

優 ノー。

亘 ……。

優 私もいる。仕事だね。アバババ、かわいい、か

わいい。

亘保 母さん？ ゲエ、あの赤ん坊、ネクタイ締め

てるよ、何やってんのお前。

優 ほつといてよ、仕事なんだから。

明日のいる方に帰ってくる。

亘 だけど、ここは気持ちがいいよ。

優 (少し離れて) あなたになんか似ていないもん。

頭悪くないもん。

亘 俺もお前になんか似ていない。

明日 鏡の中の自分と言い合ってたって仕方がない。

亘・優 (一緒に) それよりも、真由って。(顔を見

合わせる)

明日 これは17年前の新聞。

亘 宇宙服を着た子供。

明日 それが真由さ。ほら、両親も同じ服を着ている。真由は免疫が完全に不完全な子供として生まれた。

優 完全に不完全……。

明日 言葉の端々は気にしないで。すなわち、重度の先天性免疫不全。風邪一つひけないよ。彼女は321号、瓶の中で育てられたんだ。そして、忘れられた。みんなから。ニュースはすぐに古くなる。ダボハゼみたいに食いついた後、みんな忘れる。

3人輪になってしゃがむ。、赤ん坊の泣き声。声の方を見上げる3人。赤ん坊の笑い声。

明日 乳母代わりのシステムを真由は母親だと思っていた。システムの名前は、^{みゆ}。17年間、真由のために作られたシステムは動き続けた。真由

は、瓶の中で、成人し、年をとり、老人となつて、死んでいく。誰とも出会わずに。μはそのたびに姿を変えたさ。友達、恋人、夫、そして、次はなんだろう。

亘 多分、真由自身だ。鏡の向こうにそれまで仕舞っておいた。

優 きつと自分に出会う。

赤ん坊の泣き声。笑い声。

明日 瓶の中は真由の世界。

真由 こんにちは。

明日 友達が沢山やってくる。宇宙服を着た、完全無菌の友達たち。触れることの出来ない他人。

真由 ママ、ママ、ママ、何処にいるの。ママ、ママ、（次第に小さくなり、消える）

明日、優と亘の方に振り返る。

明日 だが、真由の病気は、たった注射1本で治っ

てしまった。医者が、それも彼が死ぬ間際に、思
いだしたんだよ。あの子は今なら簡単に治るって。
優 治った。それじゃ、瓶の中にいる必要はないわ
け。

明日 同時に、深い眠りに落ちたのさ。いばら姫の
ように……。誰かが起こさなくっちゃ。

真由の歌声が小さく聞こえ始める。3人が中空を
見上げる。

明日 321号室が見えるよ。

ふれあい

知らない場所に

知らない私がいる

知らない時間の中に私がいる

ふれあうことの出来ない私がいる

そこには年老いた私がいる

ふれあうことの出来ない私がいる

夜汽車の窓にもう一人の私がいる

あなたは何処へ行くの

あなたは何処から来たの

3人ブランコをこぐマイム。

明日 真由が好きな歌さ。彼女には瓶の中は無限なんだ。たった一つの世界だから。何処にも行けない。でも、何処にも通じている。

亘 瓶の中……。

優 うん、瓶の中は無限の宇宙かもしれないわ。私たちも気づかないだけよ。私もきつと瓶の中にいるんだ。小さな部屋。そこから一步も出られない。寂しい心だけが私の部屋をノックする。

亘 俺は、違うね。閉じこめられるなんていやだよ。無限の舞台の上で舞うんだ。観客もいない。千年の時間がゆつくりと過ぎていく。僕は千年前の誰かを演じ、千年前の誰かは今の僕を演じている。一

足、（そそっと進む）、一足（そそっと進む）、
能面の中にいるのは誰だ。僕なのか、彼なのか、
俺は今を生きる世阿弥だ。

謡曲が入る。

明日　そろそろ、僕は行くよ。消えて行く前に僕は
名前がほしい。薬なんてつまらないよ。

優　消えていくのに？

明日　消えて行くから名付けてほしい。

優　あした

亘　あした、君は明日だ。

明日　すてきな名前だね。あしたか。

暗転

四　優の部屋・鏡の間・能舞台

顎に手をおいて鏡を見ている優。

優 私って誰だろう。こんな顔の女。動物。雌。子供を産むことが出来る。怖い。私が人間を生むなんて。いや。だけど、私もそうして生まれてきたんだ。私は時々自分が分からなくなる。

ノックの音に振り返る。男の影が帽子を取る。

優 お帰り。今日は辛かった。うん。でも、頑張ったじゃない。マリモ、大丈夫。生きてる。呼吸をしているよ。

優、下手へ数歩。座ってマリモを見る。

優 ほら。こっちにおいでよ、一緒に見よう。

影は動かない。優の動作が止まる。

優 そっちへ持っていくね。いいの、そんな遠くからで。

ドアを開ける。

優 行ってらっしゃい。マリモ、預かっておくれ。

明日も、見においでよ。えっ、聞こえないよ。マリモは入り口だって。何処への入り口？ 僕はもう入れないって。何のことか分からないわ。

鏡を磨く亘。下手から、明日が入ってくる。明日
すごいね。これが能舞台か。

つとと、すべるようにゆっくり、橋掛かりを進む。

明日 まるで、誰かの夢のようだ。

亘 君は誰？

明日 あした。

亘 あした。それが名前。変わった名前だね。

明日 君がつけたんだよ。

亘 ……。掃除の邪魔だよ。退いてよ。

明日、能面を手に取る。しばらく眺めているが、

いきなり顔につける。

亘　だめだよ。

明日、下手に、能面を押さえたまま、走る。追いかける亘。明日、Uターンして、鏡に飛び込む。

鏡の前で立ちつくす亘。亘と対面して、ゆっくりと面をとる明日。

亘　返せよ。返さないと、お前を殺す。

亘、鏡の中に飛び込む。

五　真由の夢

暗転。

優と亘舞台中央。二人とも膝小僧を抱えて座り込んでいる。

優 ここは誰かの夢の中だって言っていたね。

亘 ああ、瓶の中で眠り続ける真由という少女の夢。
何故だろう、いつも君がいる。

優 私は、マリモを見ていただけ。

亘 マリモ？

優 うん、マリモ。本物かどうか知らないけど、小さな泡が出ている。生きていると思う。

亘 マリモって、湖の底にいるんだろう。テレビで見たことがある。阿寒湖かなあ。時々、すつと浮き上がる。

優 私の部屋のマリモは小さな瓶の中にいるの。あいつも、時々、すつと浮き上がる。

二人からだを反転させて背中合わせになる。

優 ここは一つの宇宙よ。私たちは紛れ込んだのよ、きつと。ドアが、くるつと一回転して。

亘 考えるのを止めよう。ただ、ここで歳をとっていく。昨日よりも、今日、今日よりも明日。

優 明日よりも明後日、明後日よりも、明々後日、

亘 今年より、来年、

優 来年よりも再来年、一瞬、一瞬が次々に死んでいく。

亘 子供が大人になり、老人になり、

優 私の中の赤ん坊が死に、少女が死に、母が死ぬ。

沢山の夢を残して。

優、下手に歩く。

優 まるで線香花火の炎の雫のように一瞬輝いて、消えていく。ふかーい闇の中に。まるで、一日が一生のように。

下手に姥の面を着けた明日。

優 お母さん。

亘、立ち上がる。

亘 僕はいつを追いかけてきたんだ。

逃げる明日。

亘 何故逃げるんだ。

明日 だって、殺すと言ったじゃないか。

亘 殺すって。冗談だろ。母さんを殺したら、僕は生まれてこない。

優、立ち上がる。二人、顔を見合わせる。

亘 本当に君は僕なの。

優 本当にあなたは私なの。

明日 お前は縄跳びが得意だった。ぴよんぴよん跳ねていた。

優、縄跳びを始める。

明日 お前は泣き虫だったよ。いつもかくれんぼの鬼で、影踏みの影だった。

優（縄跳びを止める）いじめられっ子で、草引きす

るふりして泣いていた。だあれもいないところに
行きたかった。

優、ふっと何か気づいたように縄跳びを止める。

優 私にはお母さんなんていなかった。

明日の方を見る。

優 あなたは誰。

亘 僕は奈落の底に捨てられていた。戸籍上の親、
生物学的な親はいるけれど。俺は捨て子さ。能な
んて、ノー。

明日、面を顔右半分ずらせる。面の下の顔は笑っ
ている。

亘 役者なんていやだ。自分の顔がほしい。

明日 他人のように生きる方がずっといいよ。気楽
でさあ、（離れて中空を見つめる）ここにおいで

よ、真由が見えるよ。

明日のそばに駆け寄る二人。

亘 目を覚ませよ。僕は君の友達になれる。きっと。

優 誰かが入ってきた。

亘 医者だ。ひとりでこの部屋は広すぎるって。

明日 病院も経営難だから。

優 もっと小さな瓶でいいって。起きろよ、寝た振りするなって言っている。誰が閉じこめたの。誰が忘れたの。ひどいよ。

優、手を差し出す。

優 私の指に、あなたの指を絡めて。

明日 起こしちやだめだ。僕の世界が壊れてしまう。

優（明日を振り返る）あなたは誰。いつも誰かの面を着けて、自分の顔をいつ見せるの。

明日 自分の顔なんて僕にはない。僕は、自分の顔

が分からない。いつも狂言回しの道化の役ばかり、
ああ、離れない、離れない。他人の顔が離れない。

明日、面を顔から少し離して片手で持つ。観客席
の方を向く。その間から、観客席に話しかける。

明日 君らには自分の顔があるのかい。

暗転

六 優の部屋・鏡の間

優 今日もマリモの君は来なかった。

マリモの瓶をひっくり返す。

優 泡のようにはじけたのかなあ。パチン。お前、
帰る所ないぞ。

鏡の前に立つ。

優　じゃん、けん、ぽん、あいこでしょ。

亘、鏡の前に立つ。

亘　じゃん、けん、ぽん、あいこでしょ。

優　鏡の中の私とじゃん、けんは、いつも、あいこ。

亘　じゃん、けん、ぽん。

優　あいこでしょ。

亘　あいこでしょ。

亘、消える。

優　じゃん、けん、ぽん、あいこでしょ。

じゃん、けん、ぽん、あいこでしょ。いつまでや
ってもきりが無い。じゃん、けん、ぽん、あいこ
でしょ

ノックの音。

優 はい。

面を着けた明日があぐらをかいて座っている。

優 裸になるんですか。いいですよ。だけど、ここより（指で線書くように）、入ったら、（ナイフを自分の顔の前にかざすふり）、あなたを刺します。

明日 癒しの部屋って書いてあるから、そういうところだと思った。

優 そういふところですよ。

明日 赤ん坊になりたくて。

優 ベビーベッドで、ガラガラを見て笑っている。

何から何まで、お母さんにみんな委ねて。

明日 女にもなってみたい。

優 赤いルージュを引きたくて、他の誰かになりたくて、やって来た。

明日 誰にもなれない。自分から逃げられない。

優　でも、鏡の中には、もう一人の自分が住んでい
るのかもしれない。

明日　そうなんだ。赤いルージュも鏡の中の自分は
ひける。

雨の音。

明日　また降ってきた。

明日、面をおいて去る。優、面の前にあぐらをか
いて座る。顔を伏せ、面を手取る。面をつけ、
ゆっくりと顔を上げる。同時に、闇の中に伏せて
いた亘がゆっくりと身を起こす。優の姿が消える。
上手の袖に上半身裸の亘が蹲っている。

亘　また降ってきた。

暗転

七　真由の夢

下手から優、上手から亘。舞台中央に息を切らし
て、駆けてくる。

亘 乗り遅れた。

優 次の電車は？

亘 同じ電車は二度と来ないよ。

優 乗り遅れた。

優、蹲る。不意に顔を上げる。

優 分かっている、乗り遅れたのかもしれない。

亘 乗るのが怖くて、遅れたのかもしれない。次の
電車待とう。

亘、ポケットに手をつっ込んで歩く。石を蹴る。

優、耳に手を当てる。

優 電車が来るよ。

暗転。

優 ずっと待ってたね。何年も。あなたは老人。

亘 君もだよ。若さなんて、あつという間の夢。

優 古い写真がどんだんたまる。

亘 まるで、アルバムの中で生きているように。

二人、ゆっくりと腰を下ろす。

亘 何回電車が通過して行ったことか。

優 百本？

亘 千本？

優 乗れた電車はひとつだけ。

亘、耳を澄ます。

亘 来るよ、一緒に乗ろう。

優の手を取る。観客席に向かって飛ぶ。暗転。真

由の声が聞こえてくる。

真由（歌うように）夢の中ではどれがほんとで、ど
れが嘘か分からない。何処が始まりで何処が終わ
りか分からない。だから、乗り遅れた電車はもう
やって来ない。同じ夢はもう見られない。

優が下手から登場。

優 また会ったね。誰かの夢の中で。

亘 君はそっくりだね。

優 誰に？

亘 女。

優 女…。

亘 継ぎ目のない皮膚に覆われて、中身の詰まった
女さ。

優 私の中身って。

亘 夢さ、さめない夢さ。

優 この夢も覚めなきやいい。

亘、優の手を取ろうとする。さっと身を引く優。
優、周りを見回す。

優 瓶の中。

亘 瓶の中……

優 ここは瓶の中よ。

亘 そんなこと、分かっているよ。

優 真由の夢も瓶の中に閉じ込められている。

亘 何処にも行けない。でも、全ての場所につながっている。

優 眠れば誰かがやって来る。

亘、観客席の方を指さす。

亘 煙突が見える。

優 見える。

亘 日の出湯の煙突だよ。町内で最後まで残った銭湯だよ。泥棒が追いつめられて、煙突に上ったんだ。

優（笑う）間抜けな泥棒。

亘、立ち上がり、観客席の天井に向かって

亘 おーい、降りて来いよお。もう、逃げられないぞ。あれ、泥じゃないや。三助だ。

優 三助……。

亘 風呂屋の三助。当然あだ名だけど。子供の頃のたった一人の友達。

優 友達？

亘 いい奴だった。人を疑うことのないきれいな目をしていた。

優 友達。私にはいない。ずっと。欲しくもない。

いつも傷つけられる。

亘 あいつ死んだよ。だけど、僕の心の中で生きていたんだ。ほら、いるだろう、あそこに。

優 うん、見える。煙突の上で片足で立った。すごいね。

二人、見えない三助に呼びかける。

亘 凄いぞ、三助。

優 凄いぞ、三助。

優、振り返る。亘も優の見ている方を見る。

優 お母さん。

亘 さつき、お母さんはいないって。

優 知らない。でも、心の中のお母さん。ほら、そこにいる。

亘 見えるよ。呼びかけてみるよ。

優、ためらう。

亘 さあ。

優（小さく）お母さん。

亘 気づかないよ。もっと大きな声で。

優（少し大きく）お母さん。（叫ぶ）お母さん。

暗転。

亘と優、下手から。靄がかかる。

亘　これは何だろうか？。霧の海のようにだ。

優、鏡の前に行く。

優　降りて行けるわ。

亘、優の手を取る。鏡の中に入っていく。

亘　真由の夢の深いところに降りて行く。

優、写真を拾い上げる。（マイム）

優　こんな所に、私の赤ん坊の時の写真がある。

亘、写真を拾い上げる。（マイム）

亘 年老いた僕の写真。

優 嘘よ、未来の写真なんて。未来の真実なんて語れない。

亘、また1枚写真を拾い上げる。

亘 君の未来もここにある。

優 年老いた私の写真。それは突然、明日やって来る。

暗転

。

八 真由の部屋

二人、鏡から出てくる。

優 ここは真由の部屋よ。私には分かる。ベッドにトイレにバス。

亘 この部屋で、ずうつと。

優 生きるための必要なものは全てある。

亘 何もない。何もないよ、この部屋には。空っぽ
なんだ。

優 空っぽ？ あなたには見えないの。真由がいるわ。

小さな真由がいるわ。

真由（少女の声）これは何？

μ 鏡よ。この部屋に欠けていたもの。

真由（少女の声）あ、誰かがいる。

μ それがあなた。

真由（少女の声）ここにも私がいるの。仲良くしよう。
一緒に遊ぼう。

暗転。亘と優は消える。

真由（少女の声）かくれんぼするものよつといで。
もういいかい。

真由（少女の声、離れて）まあだだよ。

真由（少女の声）もういいかい。

真由（少女の声、離れて）もう、いいよ。

真由（少女の声、離れて）まーただだよ。

駆ける足音。

真由（少女の声）真由ちゃん、見つけた。

シャワーの音。

真由 胸が痛いのに、μ。

μ それは真由が大人になるということ。女になる
ということ。

真由 大人？ 女？ μ！血が！

μ 落ち着いて、大丈夫。女の子は誰でも…。

真由（声、すすり泣く）

μ 泣いちゃ駄目。いいことでしょ。嬉しいことで
しょ。

すすり泣く声が、少しずつ遠ざかる。列車の音。

μ 真由は汽車が好きね。

真由 走っているのが好き。

μ また、乗せてあげるね。次は何処へ行きたい？

真由 絵本に、絹の服を売っている町があるの。お

ばあさんが売っている。後一枚しか残っていない。

九 真由の夢

下手から、優と亘。

優 後一枚しか売っていない。急がなくちや。

二人は走って上手に消える。暗転。

列車の音。

亘 乗ろう。急いで。

亘、優の手を引く。

亘 やつと乗れた。

優 やつと乗れた。

亘 間に合わないかと思った。

優 間に合わないかと思った。

二人顔を見合わせる。上手に明日（姥の面を着けている）。

亘 あの人に聞いてみよう。

優 あの人に……。

優、手で口をふさぐ。

優 絹の服を売っている店を知りませんか。

明日 知っているよ。でも、教えてやらない。

優 何故？

明日 絹はどうしてつくると思う。蚕の繭を蚕が入ったまままで、グラグラ煮るんだよ。1着の服のため、数え切れない蚕が死ぬ。知っているかい。

蚕は蛾になっても、飛べないんだよ。美しい糸を吐くためにだけに、生まれて来るんだ。

優 最後の1枚なんですよ。誰かが着てあげなきゃ。

亘 そうだよ、誰かが着てあげなきゃ。

優 真由の希望を叶えて。

明日 真由……。あの子は誰に見せるといふの。瓶の中にたった独りで住んでいる子が、誰のために服を着るんだい。希望なんて、絶

望の裏返しさ。

優 鏡の中にいるもう一人の真由に見せる。

明日 ああ、そうか、自分に見せるのか。

明日、下手を指さす。

明日 この町の外れに、売っているよ。前にも男が買いに来た。でも、婆さんは売らなかつた。仕方なしに、男はマリモを買った。

優 マリモ？

明日、下手に去る。

優（明日の背に）ありがとう。

明日振り返る。

明日 真由に白い服はきつとよく似合うよ。

暗転。亘と優下手から。

亘 また、同じ所に出てきた。

優 迷ってしまった。

亘 町には人が誰もいないようだよ。座ろう。

二人、腰を下ろす。

優 ずうっと迷うのかなあ。このまま歳をとる。

亘 真由は時間が止まるって言っていた。

優 あの子は嘘つきかもしれない。

亘 そう言えば。

優 そう言えば……。

亘 優の目尻のしわが一つ増えた。

優 えっ、

亘 嘘だよ嘘。

優 もう、亘って。

優、亘を打つまねをする。そして、大笑いする。

亘 そんなに可笑しい。

亘、優の顔をのぞき込む。

亘 涙が出ている。そんなに可笑しい。

優 だって、こんなに笑ったこと、何年もなかった。

亘 死にたいと思ったことある？

優 あるよ、いっぱい。毎日が真っ白なノートのように。
うで。

亘 何も書けない。何も書いていない空白のページ
だけが続いていく。

優 誰も愛することが出来ない。

亘 自分さえも。

優、立ち上がる。

優 亘、私を見て。

亘、立ち上がり、優を見つめる。

優 私っているよね。目を逸らさないで、ジーと見て。

亘 うん、いるよ。

亘、優の肩に手をかける。列車の音。

亘 この町には列車が、バカスカ走っている。いつたい何処から来て、何処へ行くんだろう。

優 ここに来てからお腹も空かない、トイレにも行かない。生きているのかなあ、私。私の部屋のマリモと同じ。

亘 やっぱり夢の中なんだ。ほら、普通あんなのな
いよ。

優　ほんとだ。2本足で猫が歩いている。煙草をふかしている。ラブミーテンダーを歌ってる。

優、ラブミーテンダーをハミングする。

亘　やっぱり、犬は4本足だ。

優　ワンパターン。

亘　先に言うな、こいつ。

二人笑い転げる。仰向けに寝転がる。波の音。

亘　波の音が聞こえる。

優　海が近いんだ。

亘　行こう。

二人立ち上がる。舞台が一瞬水色に染まる。

亘　海だ。

優　真由は海を見たことがあるかなあ。

亘　誰にでもあるんだよきっと。海は。僕らは海か

ら生まれて海へ帰る。

二人座る。

優 真由を瓶の外に連れだした人が一人だけいた。

亘 若い医師だった。

優 列車に乗せて、遠くへ行こうと思った。真由が死んだら、自分もそこで死のうと思った。

亘 真由を眠らせて、列車に乗せた。真由の大好きな列車に。一瞬、真由は目を覚ましたんだ。車窓に自分の顔が浮かんでいた。多分真由は覚えているんだ、どこかに行ったことを。夢の中の出来事のように。

優 二人は逃げた。でも、簡単に捕まった。

亘 医師でありながら、真由を死の危険にさらしたことで、彼は全てを失った。瓶の中の真由さえも。

優 彼がマリモを持って私の部屋にやってきたのね。

亘 彼は真由の部屋に棲んでいる。鏡の中に棲んでいる。逆さまの真由として。

二人、体を起こす。

亘 そんな話みんな嘘だよ。

優 ここでは嘘もほんと。私たちが話せば本当のことになる。これは真由と私たちの物語なんだ。

亘 俺たちの……。

優 私たちの物語は終わらない。時の輪のように永遠に繋がっていく。

亘、優と背中合わせになる。

亘 僕が死ねば、僕の物語は終わるよ。

優 いいえ、誰かに、私たちの物語は誰かに伝わるわ。私たちも誰かの物語を引き継いでいるのよ。

輪っかのように、何処が始まりで、何処が終わりか分からない。時は過ぎ去っていくのではないわ、また巡ってくる。きっと。いい、亘。私たちは永遠なの。また巡ってくる。きっと。

亘 また巡ってくる。誰かの物語として。

優 うん、誰かの物語として。糸を紡ぎ出すように
……。

亘 誰かが僕の物語を語り始める。

正面を向いて、優が砂浜に、字を書く。亘、正面
を向く。

亘 なにを書いたの。

優 亘って書いた。一を書いて、日を書いて、もう
一度一を書く。

亘 その上に重ねるよ、君の名前を。

亘が、優の名前を書く。二人の手が重なる。絹の
イメージが舞い始める。舞台に伏せていた白い服
を着た人々が起きあがり、舞い始める。何人かは
歌い始める。合唱。能の土蜘蛛のイメージ。

優 真由に服を届けなくちゃ。真っ白い絹の服を届
けなくちゃ。あの子はずうっと裸なんだから。

亘 うん、急ごう。

暗転

十 真由の部屋

真由 悲しみつてなあに。分からない

。

μ 誰かに裏切られたり…。

真由 裏切り？

μ 誰かと別れたり…。

真由 誰とも会わない。μとは別れない。

μ 大切な人が死ぬ。

真由 μも

μ 私は死なないわ。

真由 私は、私は、死ぬわ。でも、自分の死は悲しめないわ。死ぬって、μが教えてくれたね。二度と動かないことなんでしょ。お友達が見せてくれた蝶の標本のように。きれいだった。それが悲しみなの。美しいことが悲しみなの。

μ 私には分からない。組み込まれていないから。

真由 かわいそうなμ。死ぬことが出来ないの。

μ 誰かが来る。

男の影。ベルの音。

男 真由、元気か？

真由 先生？ 注射の時間…。

男 いいや、違う。少し話したかったんだ。君は汽車に乗りたいたって言っていたね。

真由 今日も乗ったよ。

男 絵本の中の汽車じゃない。本物の汽車だ。

真由 本物？ よく分からない。

男 瓶の外に出よう。

真由 外…。

男 明日、午前0時。来るよ。外に出たら、真由は死ぬかもしれない。その時は僕も死ぬ。瓶の中で、一人生きるよりも、一緒に死のう。薄いガラスに区切られて、君は瓶の中で飼われている触れることの出来ない美しい妖精。

真由　ここから出ていくの？。何処へ。そこに何が
あるの？

μ　そこにあるのは死だけ。あなたの生きる世界は
瓶の中だけ。

男　機械は黙れ。真由、君にふれあうことが出来た
なら、僕は死んでもかまわない。この冷たいガラ
スを今すぐにでも壊したい。

μ　黙らない、私はいつも正しい判断を下す。先生、
あなたは医者、間違っている。命を助けるあなた
が命を殺す。あなたは狂っている。

真由　先生、行きます。死というものが私には分か
らないけれど、先生の手には私は触れてみたい。薄
いガラスの向こうにある手に。命とひきかえに。

瓶のオブジェに真由の影が浮かび上がる。

男　約束の絹の服を、きつと買ってくるよ。誰かが
来る。それじゃ、バイ。

真由　バイ。明日の午前0時。時間、時間、もっと
早く過ぎて。一秒、一秒、もっと、もっとと速く。

十一 真由の夢

下手から、優と亘。

優 あの人には嘘を教えたのかなあ。町の景色は変わるけれど、どの家にも明かりがついていない。

亘、少し離れて、優を手招きする。

亘 あそこに誰かいるよ。

上手に明日、座って糸巻きを回している。二人近づく。

優 いろいろな役大変ね。

明日 私は自分という役しか演じていないよ。もし、いろいろな役に見えるなら、それは私の中にいろいろな役者がいるからだよ。

亘 絹の服を売って。

明日 いつもこうさ。近頃の若い者は人の話を聞いていない。特に脇役の話は無視する。本当は、この世を動かしているのは脇役なんだから。

優 糸巻きに糸がない。

明日 見えない糸で紡ぐのは、明日の夢。僕の名前なんか忘れてしまっているだろう。やってられないなあ。

亘 誰だっけ？

明日 明日だよ、明日。君が名付けたんだよ。

亘 僕もいろんな役をする。役者なんだから。

明日 どんな役？

亘 幽霊。

明日 僕の役だ。

亘 女。

明日 それも僕の役だ。

亘 男。

明日 それも僕の役だ。

亘 鬼。

明日 それも僕の役だ。

亘 神。

明日 ゴッドだね。いろんな神様がいる。それも僕の役だ。

亘 狂。

明日 狂。狂う。それも僕の役だ。

亘 序、破、急

亘、舞う。

明日 序、破、急。それも僕の役だ。

亘 いつまでやってもきりがない。

明日 いつまでやってもきりがない。それも僕の役だ。

優 絹の服を売ってください。

明日 はいそうよと売れないよ。もう二度と作れない。絹糸がないんだから。

亘 何かと交換しよう。

明日 あの鏡とならいい。

鏡を指さす。

亘 あれは駄目だ、僕が戻れなくなる。

明日 鏡の中で、俺のようにいつも誰かの影として
棲むがいい。誰かが泣けば、お前も泣く。誰かが
笑えば、お前も笑う。

亘、明日を見つめる。

亘 いいよ、そうしよう。

優 亘……。

明日、糸巻きを回す。

明日 売った。お前の心に。真由に渡してやれよ。
何時だったか、真由の影がやって来た。服がほしい
と泣いていた。

明日、服を投げるマイム。亘、受け取る。

暗転。

優 寒い。

亘 真由が泣いている。

優 風がすすり泣きの声のように聞こえる。急ごう、
真由のいるところに。早く行かなければ、この世界
が消える。

暗転。

十二 真由の部屋（声）

真由（声） 大変、今何時かしら。

μ（声） 午前0時。

真由（声） 先生。

μ（声） 誰も来ないわ。ここは瓶の中。

十三 真由の夢

優と亘が下手から出てくる。霧がかかる。

優 本当の悲しみは悲しみを知らないこと。

亘 この深い霧のように。一人という悲しみ。

優 一人は悲しくない。私にはあなたという影がある。

亘 僕には、君という影がある。

優 行きましよう、行き着くところまで。

明日が行く手に立ちふさがる。

明日 駄目だよ、これ以上、真由の夢の奥深いところに入っていくのは危険だ。戻れなくなる。二人とも、鏡の中に溶けて消えてしまうよ。

優 真由の夢の一番深いところに何があるの。

明日 一人という夢が棲んでいるだけさ。それ以外何もない。深い闇が永遠に続くだけ。

優 私も瓶の中にいるのね。一人で生まれて、一人で死んでいく。闇から出て、闇に帰って行く。

亘 行こう。

明日 行っっちゃ駄目だ。

暗転。無数のスポットが舞う。

明日　マリモがいる。

二人手を伸ばす。捕らえようとしても、捕らえられない。舞台上手に、蹲る真由にスポットが当たる。

十四　真由の部屋

優　あなたが、真由…。

亘　君が、真由…。

真由がゆっくりと立ち上がる。

真由　あなたは誰…。

優　私は優。真由…。私はあなたの夢の中にいるの。

亘　僕は亘。服を届けに来たよ。

真由　ありがとう、優、亘。

優　よく似合う。

真由　鏡を見なきゃ。素敵でしょ、μ。μ。μは何

処？

亘 誰かがスイッチを切ったんだ。もういない。

真由 スイッチ？ 何のこと？ ム！（叫ぶ）

優 目覚めるのよ真由。もう一人のあなたは瓶の外にいるのよ。

亘 会いに行かなきゃ。

真由 邪魔しないでほしいなあ。私は先生に連れだしてもらおう。それまでここにいる。

亘 誰も来ないよ。

真由 来るわ、明日の午前0時。私の指と先生の指がふれあう。それまで、ずっと待っている。希望って本当になると希望じゃなくなる。本当にならないうちに、ずっと待てる。ずうっと。

亘 明日はとつくにきているよ。

真由、鏡の前に立つ。すっと手をのばす。

真由 先生はいつもこの中にいる。明日の午前0時に私の部屋にやってくる。私を連れ出しに。

亘 先生なんていない。

優 先生は鏡の中にいるあなたよ。

真由 嘘！。

蹲る真由。

真由 先生、あなたは永遠に私の部屋の前で立ち止まる、あなたは鏡の中の私かもしれない。でも、私はこのままで幸せ。外の世界なんか知りたくない。

真由、突然狂ったように身を回転させる。

真由 知識はみんな μが教えてくれた。1たす1は3。

亘、優笑う。

亘 ばーか、2だよ。

真由 瓶の中では、3になったり、100になったりします。おばあさんが、小さな女の子のまねを

して、女の子はおばあさんのまねをする。そのうち。

亘・優そのうちに…。

真由 どちらがおばあさんで、どちらが小さな女の子か分からなくなる。だから、1たす1は千。

真由が、優を指さす。

真由 1足す

次に亘を指さす

真由 1は1。

優と亘、顔を見合わせる。真由、踊るように亘と優に近づく。

真由 本当のことって何？。そんなに大事なことの。

亘 大事だよ。

真由 みーんな、誰かの夢かもしれない。みんな嘘
かもしれない。

亘 僕は、誰かの夢なんかじゃない。たとえば、僕
は僕で、（優を見る。）君じゃない。

優 私は、（口ごもる）

亘 君は、

優 私は、私は、誰かの夢かもしれない。

亘・優 私（俺）は私（俺）。君は瓶の中から出ら
れない標本。

真由 私を標本にしたければそれでもいい。私の体
をピンで止めて。羽を広げた蝶のように。歳もと
らずに、若いまま、時間が止まる。美しいまままで。

真由、白い布を広げる。

真由 すごく眠くなっちゃった。

優 夢の中で眠っちゃうなんて。

亘 どうなるの。

真由 瓶の中を覗く人もいない。見捨てられた物語。

たった一人の物語。私って、誰なんだろう。

優 私にも私分からない。生きている私が見えない。
い。

真由 あなたは誰なの、あなたなの私をそっと瓶の
中に置いたのは。

優 私かもしれない。

亘 僕かもしれない。

明日（客席から）真由が目を覚ますよ。瓶が砕かれるよ。

亘・優 ええっ。

真由（小さな歌声）

ふれあい

知らない場所に

知らない私がいる

知らない時間の中に私がいる

ふれあうことの出来ない私がいる

年老いた私がいる

ふれあうことの出来ない私がいる

夜汽車の窓にもう一人の私がいる

あなたは何処へ行くの

あなたは何処から来たの

眠たげに、徐々に小さくなる

。

暗転。

鏡を境に向かい合う、亘と優

十五 鏡の間・優の部屋

優 何かが壊れた。

亘 何かが壊れた。

ふっと、目を合わせる。

優 みつけた。こんな所に隠れていたんだ。

亘 僕の中の君。

優 私の中の君。

亘 君は優。

優 あなたは亘。

亘 亘は優の影。優は亘の影。亘が優を見たければ、
鏡を覗きなさい。

優 優が亘を見たければ、鏡を覗きなさい。もう一
人のあなたがそこにいる。

亘の右手と、優の左手が合わさる。

優 どちら側にも行けないね。

亘 うん。会えるとしたら、誰かの夢の中だね。

互いに背を向ける。亘、鏡の前に立ち、能面をつ
ける。亘のいる場所のみ暗転。亘は鏡の中の位置
に移動している。真っ二つに能面が割れる。

ノックする音。

優
はい。

優、観客席の方を振り返る。観客席で、瓶の割れる音。暗転。

カーテンコールは行わない。舞台の照明はつくが、そこには出演者は誰もいない。鏡と、瓶の装置だけが、見捨てられたようにある。

幕

作者より

「瓶の中」もう一人の自分に出会う物語です。私は時々、もう一人の自分が、私の知らない空間にいるのではと思うことがあります。この空間という意味は、時間や世界（真由の夢、鏡の中）も含んでいます。そこは閉ざされた瓶の中。優と亘のひたむきな姿。生きることの切なさ。そして、能の舞台のような無限の世界。誰にでも出会える。誰にも出会えない。「かごめかごめ」の童歌のように、夜明けの晩、後ろの正面。そこでは誰かの物語を受け継ぎ、自分の物語を誰かに渡す。それが輪っかのように繋がっていく。そんな世界を書きたいと思いました。

私（自分）とは不思議なものだと思いませんか。閉ざされた瓶の中のように、私は私から抜け出すことは出来ない。どこにも行けない、でも、すべての

場所につながっている不思議な空間です。赤ん坊、
青年、老人、そして、やがて瓶が割れ……。その
終わりから、また、何かが始まる。この不思議な空
間に、私と私の奇妙な恋をブレンドしました。

二千年 京都・スペース・イサン東福寺

作品2 失われた時間 [目次へ](#)

失われた時間

登場人物

はるか
遙

万福寺まんぶくじ一歩いっぽ・おっちゃん

ダスキンの男・矢崎やざき・医師

てのひら
掌 教の女たち

看護師

その他（声）

影絵 かくれんぼ（映像）

影絵。子供の声。女の子は三歳。男の子は十歳。

兄妹である。旧家の蔵の中。

女の子（声） まあだだよ。

男の子（声） もう、いいかい。

女の子の影。

女の子（声） まあだだよ。

女の子の影が消える。男の子の影に切り替わる。

男の子（声） もう、いいかい。

男の子の影が消える。長持ながもちの影が現れる。女の

子の影が現れる。

女の子（声） まあだだよ。

女の子の影が、長持のふたを開ける。

女の子（声） もう、いいよ。

女の子の影が長持の中に消える。蓋が閉まる。男

の子の影が現れる。立ち止まり、周りを探す。

男の子（声）（小さく）もう、いいかい。

男の子の影が長持を見つける。長持のふたを開け

る。中に消える。ボタンと長持のふたが閉まる音。

fade-out

一 客席

万福寺一步が登場。特攻隊の飛行服を着た万福寺

一步。七しちしょう生報国ほうこくの鉢巻。客席の間をさまよう。ラ

イトが一步に当たる。眩しさに顔を手で翳す。電車が通り過ぎる轟音。一步が消える。

二 暗転の舞台

救急車のサイレン。暗転の舞台での会話。声のみ。

救急隊員 A もうすぐ、神崎町。えっと、ローソ
ン？ あります。そこを右。

救急隊員 B 了解。山野遙のマンションに向か
います。

救急隊員 A 山野遙。林さんも運んだって。その時
は海野遙。

救急隊員 C 僕も行きましたよ。河野遙。全部同
一人物。

救急隊員 B 七回目らしいですね。

救急隊員 A 自殺常習犯か。誰が通報してきたの？

救急隊員 C 本人らしいですよ。

救急車の止まる音。サイレンが消える。

救急隊員 A 七階だよね。

救急隊員 C 七〇二号。先に行って、エレベーター
を確保して。

救急隊員 B 了解。ストレッチャーを下ろしてください。

慌ただしい足音。

救急隊員 B 管理人さんですか？

管理人 そうだよ。部屋の鍵は開けてある。とにかく迷惑なんだから。

ドアを開ける音。舞台が徐々に明るくなる。遙が仰向けに倒れている。

救急隊員 A はやく、ストレッチャーを持ってきてよ。

救急隊員 C うつ、糞してるよ。

遙の静かな寝息。かすかにいびきが混じる。手品ショーのように仰向けに寝たまま遙の身体が浮き上がる。やがて空中で停まる。

三 癒しの部屋

遙の身体が降りてくる。ベッドの上に降りる。遙が目を開ける。ゆっくりと髪をかきあげる。そのまま真っ直ぐに両手を伸ばす。隣のベッドにいる一歩に気づく。

遙 君は誰？

一步 一步。一步、二歩の一步。万福寺一步。

遙 万福寺？

一步 家がお寺やねん。あだ名はチンポ。一步とチンポ。先生まで、出席を取る時に、万福寺、声を小さくして「チンポ」。生徒がどつと、笑うんや。

遙 そのチンポ君が何で私の隣にいるの。

一步、突然立ち上がる。敬礼をする。

一步 特攻隊。万福寺チンポ。自分が間違っただけするねん。もとへ、万福寺一步。(下を向いてうなだれる)分からへん。突然来てしもた。俺、昭和元年二月一六日生まれ。タイムスリップって言うんやて。

遙 タイムスリップでしょ。

一步が小さく笑い出す。

遙 何がおかしいのよ。

一步 タイムスリップでしょなんて。偉そうに言うて。君は二日間、眠りっぱなし。八回、おならをした。自殺は七回、おならは八回。

遙 ……。

一步 ブーが三回。スーが三回。ブー スーが二回。
ほんで、（指を折って数える）。

遙 そんなにあたしのおならが面白いの？ もし、
本当でも、それを庇うのが男の人。いい、こんな話
があります。女王様がおならをした時、横にいた、
騎士が、失礼しましたと言いました。あなたにはそ
んなデリカシーもない。

一步 デリカシーなんて知らん、せやから、多分あ
らへん。かあちゃんがでかいのをぶっ放してたけど。
若くてきれいな人のおならなんて初めて聞いたよ。

へー。

遙 それって駄洒落。

一步が指先をにおう。

遙 まさか。変態！

遙が一步に向かって枕を投げる。一步が飛び退く。
上手に逃げる。入れ替わりに白衣の男が入ってく
る。ゆっくりとベッドのそばの椅子に腰を下ろす。

遙 先生……。

白衣の男 特攻隊は何処へ行きましたか。

遙 特攻隊？

白衣の男が隣のベッドを指さす。遙が首を振る。

遙 知りません。

白衣の男 狂うてるのですなあ。ところで、どうですか？ ガスは出ましたか。

遙 (恥ずかしそうに、下を向いて小さく頷く) ようです。

白衣の男 何発？

遙 八回。

白衣の男 八回も……。それは。

二人とも下を向いて黙る。

遙 まさか、へーなんて言わないですよ。先生。

また、長い間。男、ゆつくりと顔を上げる。

白衣の男 どうして分かったんですか。

遙があきれたように男を見る。ふーとため息をついて、やっと気持ちを切り替える。

遙 男の人と同室はいやです。男女七歳にして席を同じうせずって。

白衣の男 古いなあ、あなたも。治療ですよ。心を病んだもの同士が、お互いを知ることによって、治療する。自分だけの世界から抜け出すのですなあ。

遙　でも、嫌です。おならを数えている男なんて、
変態です！

白衣の男　へー。一度は言わなきや。

白衣の男が立ち上がる。

白衣の男　特攻隊も、そんなに悪い男じゃない。突
然、地下鉄に現れた特攻隊。DNA鑑定までやろう
って書いた新聞もあつたくらいだから。音矢の事件
がなければ、今も、騒がれていたかも。かもは鴨鍋。
サボってないで、仕事だ。掃除歴四十年。

突然、白衣を脱いで、箒で床を掃き出す。

ダスキンの男　レ、レ、のレ。僕はダスキンおじさ
ん。お掃除、お掃除、ダ、ダ、ダスキン、ピツカピ
ツカ。

ダスキンの男が下手に退場。照明が暗くなる。遙
が、ベッドに戻る。遙が寝返りを打つ。ゆっくりと
仰向けになる。片手で胸を押さえる。右手がシート
の中をゆっくりと降りていく。膝を立てる。上手か
ら飛行服姿の一步が入ってくる。遙の様子に立ち止
まり、身を隠す。遙の息が早くなる。一步がズボン
の間に手を入れる。遙を見つめたまま、蹲る。一步

の息も荒くなる。二人が同時にいく。

暗転

四 客席

飛行服姿の一步が、客席にいる。地下鉄の騒音。電車の光が舞台を通過する。一步は客席をさ迷う。

時々、客に声をかける。一步以外は【声】のみ。

乗客1 何ですかね。あれ。

乗客2 突然話しかけないで下さいよ。眠ってるんですから。

乗客1 立ったまま眠ってるんですか。

乗客2 勝手にでしょ。ちよつとでも体を休めて、会社に行かなきゃ。

一步が上手から舞台に上がる。

乗客1 あっ、乗ってきた。なななまほうくに。中華ラーメンの広告かなあ。

老人 「しちしようほうこく」って読むんだよ。この世に七度生まれ変わったとしても、必ずや国に奉じてその恩に報いるという意味。若いもんは何にもしらん。ところで、

乗客1 はあ、何か？

老人 わしは何処へ行くんや。

電車のドアが閉まる音。電車の動き始める音。

乗客2 何かよう分からんなあ。映画の宣伝か。

乗客1 俳優には見えないすよ。とぼけた顔をしてる。

乗客2 関わらん方がいい。

乗客1 それがええ、せやけど、こっちへ来る。

一歩が舞台中央を歩く。

一歩 すんまへん。ここ、何処ですか？

乗客2 もうすぐ難波。

一歩 難波ですか。大阪か……。帰ってきてたんや。

乗客1 平成の特攻隊か。

一歩 屁せえて。してもええのん。

突然携帯電話の着メロが鳴る。一歩が驚いて、飛び退く。

女（携帯電話） うん、もうすぐ難波。九時に高島屋の前やね。

一歩 びっくりした。突然喋らんといて。

女 なんや、あんた。ちんどん屋かいな？

一歩 特攻隊や。

女 特攻隊。何それ？

一歩 今は昭和二十年やろ。

女 昭和なんて、とっくに終わってるわ。

一歩 とっくに終わっている？ (叫ぶ) 何^{なん}や、そ

れ。

電車のドアが開く音。

女 (叫ぶ) 駅員さん、変な人がおるんや。

駅員 痴漢ですか。

女 痴漢ちゃうけど。

駅員 そうでしょうね。

女 どういう意味や。

駅員 (慌てて) とにかく、君、ちよつと来なさい。

一歩が舞台から引っ張られるようにして客席に下

ろされる。

一歩 はい、昭和二十年四月十五日未明。えっ、四

カ月後に戦争が終わるんやて。(叫ぶ) 嘘や！

(暗転)。遙が下手にいる。小さく歌い始める。

時間

時は流れる

流れ落ちる砂のように

掬っても、掬っても

時は次々に消えていく

私が過ごしたひととき一時

私が過ごしたひび日々

私が過ごしたとしつき年月

今というとき時は帰ってこない

子供は大人になり

年を取り

やがて みんな 旅立つ

また 子供が生まれ

新しい時が歩き始める

時は旅人

人は時と共に旅に出る

(間奏)

時は見えない

いつか見た夢のように

追いかけても、追いかけても

時は次々に消えていく

あなたと過ごした一時

あなたと過ごした日々

あなたと過ごした年月

今という時は帰ってこない

子供は大人になり

年を取り

やがて みんな 旅立つ

また 子供が生まれ

新しい時が歩き始める

時は旅人

人は時と共に旅に出る

(間奏)

時は旅人

人は時と共に旅に出る

暗転

五 癒しの部屋

一歩がベッドにうつ伏せになってリングを眺めている。時々リングを回す。

遙 リンゴがそんなに珍しいの？

一歩 リンゴがピカピカ光ってる。リングちやうみ
たいや。リングがこんなきれいってしらんだ。

遙 おかしな子。リングはリングだよ。

一歩 何もかもがある。スーパーマーケット。ピカ

ピカヤ。見たこともない食べ物があふれてる。

遙 君の話には接続詞がないのだなあ。

一步 バナナだってある。食べたことも見たこともなかった。名前だけは知ってた。バナナ！ 三本食べた。夢みたいや。三本やで！

遙 会話にならない。一方通行の言葉。

一步 この世界は夢にあふれてるよ。徴兵検査もない。おなかを空かすこともない。便所は水洗。お尻も洗ってくれる。手を出したら水が流れる。洗い終わったら、乾かしてくれる。音楽も素敵。音に体が乗っていく。

一步 が立ち上がる。ヘッドホンを付ける。

一步 何でもあるんだ。イチゴもある。チョコレートもケーキも、ビールもタバコも。かっこいい服に、ジェットコースター。空中を翔る回転木馬。もう夢の国だ。聞いてよ、遙。

遙 呼び捨てにしないで。

一步 昨日の夜は観覧車に乗ったよ。目映いばかりのネオンだよ。俺は今、大都会にいるのだ。もう、チンポとなんて呼ばせない。

遙 それは関係ないと思うけど。

一步 みんな同じ顔をした美しい女の子。お尻も、

お乳も、ユツサユツサ。ヘイ、ミュージック。

夢に夢中

なんでもあるさ、この世には

驚き、不思議、うっとりする甘い夜、

あー快感

僕は夢に夢中

腹をすかせていたあの頃は

つぎはぎだらけのズボンをはいて

足にいっぱい霜焼けづくり

青っぱな垂らしていた俺は

もういない

戦争に行つて、死んでしまうこともない。

おお、天国

僕は夢を見ていればいい

僕は夢に夢中

一步がバク転をする。

遙 (拍手する) 格好いいぞ、チンポ!

一步 女の子がチン……。そんなのタブーだよ。下

品だよ。今のぼくは洗練された都会人。

遙 一度言ってしまった、もう、タブーじゃない。言葉にタブーはない。チンポ！ もう一つおまけにマンコ！ どうだ、まいったか。

一歩が急にダンスを止める。

一歩 (腕時計を見る) 時間だ。

一歩が走って上手に消える。遙が床に落ちていたリンゴを拾う。そして、一回だけかじる。かじったリンゴを椅子の上に置く。リンゴにライトが当たり、周りがfade-out。リンゴが空中に浮く。ダスキンの男がfade-in。箒を右手に、左手にかじったリンゴを持ったダスキンの男がいる。

ダスキンの男 特攻隊は行きましたか。また、パチンコだなあ。軍艦マーチが懐かしいのかな。音矢とえらい違いだ。

遙 (闇の中から) 音矢？

ダスキンの男 この上に入院しているよ。朝六時に起きて「君が代」を歌う。

遙 そう、やっぱり、あれはレコードじゃなくて、誰かが歌っていたんだ。

ダスキンの男 礼儀正しい少年だよ。挨拶もきつちりとする。人の目を見て話す。音矢は浅山社会党委員長を刺した。でも、狂ってなんかいない。

ダスキンの男が fade-out 遙が fade-in

遙 どうしてだろう。覚えている。私が生まれるずーと前のことなのに。

遙が、窓際に近づく。カーテンを開ける。

遙 ここには季節がない。朝が来て、昼が来て、夜が来る。一日一日が同じ繰り返し。雲は動かない。雨も降らない。風も吹かない。夜の空に星はない。月もない。鳥も飛ばない。灰色の風景の、遠くに灰色の葉っぱをつけた木が一本見えるだけだ。

遙がカーテンを閉める。

遙 (叫ぶ) 教えて、ここは何処なの。

遙が fade-out ダスキンの男が fade-in 手にリングを持っている。

ダスキンの男 (リングをかじる) ここは何処でもない何処か。リングは美味しい。リングをかじっても血が出ない。遠い昔のコマーシャル。

リングを目の前に差し出す。

ダスキンの男 血が出ている。歯が一本リングに突き刺さっている。また抜けた。下の歯だから、屋根に投げよう。また生えてこい。(歯を上に向かって投げる) 生えるわけがないか。さあ、さあ、掃除だ。

六 病院の廊下

遙が Fade-in 遙が立ち上がる。髪を指で梳いて後ろを向く。遙が Fade-out 上手から、フリーライター 矢崎が登場する。ひも付き眼帯を斜めにかけている。

矢崎 フリーライター 矢崎登場。やーだあ。一人で二つの役をやると、前の役が残像みたいに残っている。早変りの時は特にそうだ。レレレのオヤジ、出て行け。(叫ぶ) 俺は矢崎だ。ある時は片目の運転手、ある時は、フリーライター、また、ある時はレレレのおじさん。

矢崎が、ふっと、考え込む。

矢崎 演じるというのは人間にしかできない。猿にはできない。と、言って去る。(背を向ける。また、正面を向く) 猿芝居って言葉もあるけれども。

矢崎が考え込む。

矢崎 俺は何のために出てきたのだろう。俺の役は。（台本をめくるマイム）何にも書いていない。確かに、誰も役なんてない。みんな主役で、みんな脇役だ。でも、引っ込みがつかない。台本もなしで、こうして一人で立っていると、舞台というのは無限の闇だ。無数の目玉にさらされて、俺という存在は消えてしまう。自分の葬式を見ているように。人はみな、人生という舞台の芸人。

〈Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow

ゆつくりと前に歩く

矢崎 そして、昨日という日はすべて土に返る。

矢崎は客席に背を向ける。客席に向くと片手に小さなろうそくを持っている。ろうそくを照らしながら舞台を歩き回る。

矢崎 死への道を、馬鹿者どものために照らしき
た。

消えろ、消えろ、短いらうそくよ！

人生は歩く影法師、あわれな役者だ、

舞台上で持ち時間だけ見得をきり、わめき、
出番が終われば、聞く人もなし。

矢崎 人生は舞台。独り舞台。家族舞台。会社舞台。
社会舞台。

人生は歩く影法師、あわれな役者だ、
舞台上で持ち時間だけ見得をきり、わめき、
出番が終われば、聞く人もなし。

〈Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow

シエイクスピア。マクベス。

矢崎が突然立ち止まる。聞き耳を立てる。

矢崎 「君が代」が聞こえる。久しぶりだなあ。大
相撲の千秋楽ぐらいしか聞かないもん。音矢が歌っ
ているのだろうか。この病院には、自称特攻隊の万
福寺一步もいる。浅山氏暗殺の音矢もいる。ゴシッ
プの種がいっぱいだ。一步は女の子と同室だって。
治療らしいがこれも暴いてやる。見出しはこうだ。
「前代未聞！ セックス治療法」。おっと、ここだ、
三四五号室。覚えにくい番号だなあ。

ドアが突然開く。遙が出てくる。

矢崎 おっと、ごめんなさい。（振り返る）一步と

同室の女かなあ。どこかで見た顔だ。どこかで……。

麦畑かなあ。

突然歌いだす。

誰かさんと誰かさんが 麦畑

チュツチュチュツチュしている いいじゃないか

僕には恋人 ないけれど

いつかは誰かさんと 麦畑

誰かさんと誰かさんが 傘の中

しっぽり濡れてる いいじゃないか

僕には相手が ないけれど

ぐっしより濡れてる 破れ傘

誰かさんと誰かさんが 暗い道

イチャイチャしている いいじゃないか

俺には関係 ないけれど

頭に来ちやうぜ 麦畑

うちのパパとうちのママが お茶の間で

デレデレ寄り添う いいじゃないか

まだまだ眠たく ないけれど

パパママお休み ごゆっくり

僕だってミヨちゃんど　麦畑

どうしてもキスした

ザマアみる

見ている君らにや　わからない

こんなにこんなにほんとに楽しい　麦畑

矢崎　やったぜ！　（間）。受けない……。独り舞

台。こんなに時間を貰ってもいいのかなあ。脇役なの。
の。

矢崎がドアをノックする。聞き耳を立てる。中か
らの反応はない。ドアを少し開けて中を窺う

矢崎　失礼しますよ。

ベッドが fade-in

矢崎　女がすぐに帰ってくるかもしれないから、急
がなきゃ。男物のパジャマ。（ピンセットと小さな
ビニール袋（四 cm × 四 cm）を取り出す）こっちが一
歩のベッドだ。万福寺は空襲で焼けちゃったけれど、
万福寺一步のへその緒は残っていた。探して、探し
てやっと手に入れた。へーそお。まだレレレがいて
いる。しっこいなあ。

枕をひっくり返す。ピンセットで髪の毛をつまむ。矢崎 DNA鑑定で、やつの化けの皮を剥いでやる。これだけあれば十分だ。(ふと、隣のベッドを見る)。こっちも採取しておこうか。後で、何かの役に立つかもしれない。

もう一枚ビニール袋を取り出す。矢崎が遙のベッドに。枕を調べる。

矢崎 ない。清潔なんだなあ、彼女は。万福寺一步とはおお違いだ。

枕元から順番にベッドを調べていく。

矢崎 あった。(一本の毛をつまみ上げる。短い間)縮れている。

思い切り間をとってください。観客の誰かが笑うまで。誰も、笑わなければ、サクラに笑ってもらいます。

ドアが開く音。急いで毛をビニール袋の中に入れる。遙が入ってくる。矢崎がベッドから飛び退いて、一步のベッドの方を見る。

遙 誰？

矢崎 万福寺一步さんを訪ねてきました。

遙 彼はいません。

矢崎 そうですか。いつ帰りますか？

遙 知りません。

矢崎 では、出直してきます。彼は携帯電話を持っていますか？

遙 持っていますよ。五つも。

矢崎 五個も……。

遙 でも、電話番号は知らない。

矢崎が遙の顔をまじまじと見る。

遙 何か、私の顔に。

矢崎 どこかでお会いしたような……。

遙 私は知りません。

矢崎 てのひら……。そうだ、てのひら掌ひら 教だ。

遙 何のこと。私は知らない。

矢崎 君は……。

暗転

七 癒しの部屋

上手のベッドに一步。下手のベッドに遙。腰掛け

ている。

遙 今日はお出かけないの？

一歩 行かへん。

遙 うん。大阪弁に戻ってる。

一歩 大阪弁しか喋られへん。

遙 そう。でも、なぜ？ 楽しいことがいっぱい
て言ってたじゃない。

一歩 はじめは自動ドアが面白うて。入りマース。

はい、どうぞ。守衛さんに叱られるまでやってたん
や。

遙 馬鹿みたい。

一歩 ドアは自分で開けて入るもんやね。

一歩 が黙って自分の足元を見る。

一歩 今日は君と話したい。

遙 (立ち上がる) 私はいや。誰とも話したくない。

一歩 (あわてて) 五分でもええんや。聞いてくれ
るだけでもかまへん。

遙 がベッドに腰掛ける。小さくあくびをする。

一歩 はじめはおもろかった。何でもある。ハンバ
ーガー、トマト、リンゴ、イチゴ、チョコレート、

ステーキ、見たこともない果物。地下鉄に乗ったら、何処にでもすぐ行ける。アメリカ人もいた。初めは逃げたけど、すぐに友達になった。もう、敵じゃない。マイ・フレンド。ゲームにもハマった。ファイナルファンタジー。ドラゴンクエスト。知らない人ともチャットで会える。ここはユートピアおもやと思た。遙 ユートピア。君、言葉が増えたね。

一步 その分……。

一瞬の沈黙。

一步 言葉を失った。

一步は遙を見つめる。そして、目を逸らす。足元を見る。

一步 僕がここにいるという証拠があらへん。僕はあんなだけに見える幽霊かもしれへん。僕の過去は昨日見た夢かもしれへん。

遙 君はいるよ。間違いなく。

一步 ジェットコースター。映画館。ストリップ。夢のような国や。女の子も、特攻隊には優しかった。女子大生に抱かれたんや。それも東大や。美しくて賢くてポイン。君に興味があるって。初めての女

の人。おっぱいを舐めて、僕は何回も、何回も、射精した。ほんで、泣いた。

遙 泣いた……。

一步 無性に悲しかったんや。何もかもが簡単すぎる。

遙 簡単。簡単じゃないよ。何もかも。私には簡単なものは何もなかった。

一步 遙。僕は簡単なもんしか見えへんようになった。

一步、すーと立ち上がる。窓際に進む。

一步 帰りたい。トンボやバッタを追いかけた。日本は勝つと信じてた。般若心経をよう覚えんで坊主になるのを諦めた。おやじは適当に言うといったら、ええって言うたけれど。一生懸命に死んだはるのに可哀そうや。せやけど。あそこには、僕の時間があった。帰りたいよ。

遙 帰れば死ぬよ。

一步 ここには、何もあらへん、ビルディングが建ち並び、人があふれ、笑い声があふれ、飢えることもない。でも、何も^{なん}ない。みんな失^{なん}われてる。

一歩が舞台中央まで歩く。ふっと、聞き耳を立てる。

一歩 音矢が歌^{うた}てる。

遙 また、朝が来たんだ。

遙がタバコに火をつける。

遙 マッチ擦る つかのま海に霧ふかし 身捨つる

ほどの祖国はありや。

一歩 寺山修司。

遙 よく知っているね。

一歩 音矢の部屋にあった。

遙 音矢の部屋に。

一歩 うん。小さい部屋やよ。

遙が、小さく「君が代」を口ずさむ。

君が代は

千代に八千代に

さざれ石の

いわおとなりて

こけのむすまで

遙 もう、誰も「君が代」を歌わない。たった五行

の国歌。美しいよ。私は好きだ。自分が生まれた国

だから。

暗転

八 地下鉄の駅

白い着物を着た女の人が闇の中を駆け巡り始める。

船の影が浮かびあがる。遙が下手に現れる。

遙 てのひら 掌 教って、覚えていますか。おっちゃんは

教祖って言われたけど、自分から、そう言ったことはなかった。

下手のベッドに遙が腰掛ける。

遙 おっちゃん。地下鉄の聖せいじん人。

電車の明かりが、轟音とともに通り過ぎていく。

駅のベンチに腰掛けた男の影が浮かび上がる。

遙 おっちゃん……。そんなわけはない。私が殺したのだから。えっ、私は今何て言ったの。誰か教えて。私は今何て言ったの。

おっちゃんの影が消える。

遙 時間って残酷だなあ。みんな消え去っていく。

遙が舞台の中央まで歩く。ベンチに腰を下ろす。

遙 朝の八時きっかり。おっちゃんは地下鉄の駅に現れる。駅の入場券をシャツのポケットに差し込んで、いつもの場所に腰掛ける。ホームに電車が入ってくる。ドアが開く。はきだされる人々。ドアが閉まる。暗い穴に消えていく電車。繰り返される風景を飽きることなく眺めている。目を細め、口元は少し笑っているようだった。一日に何人の人々が、おっちゃんのそばを通り過ぎるのだろう。誰もおっちゃんに気づかない。気づいても、一歩歩くと、忘れる。

無数の影が舞台をよぎる。遙が立ち上がる。くりと一回転する。遙がFade-out 野球帽をかぶったおっちゃんがベンチに座っている。遙が下手に現れる。

遙 知恵遅れのおっちゃん。シャツはいつも白い。髭もきれいに剃っている。あれは、きつと、どこかの金持ちだよ。空中を見つめ、何か一生懸命思案しているような時は、「うんこをしようか考えている時なのだ」。ほら、立ち上がった。ほら、でっかい屁をこいた。知恵遅れだよ、可哀想だね。中学生

の男の子が絡む。

中学生（声） おっさん、何やってんだよ。

遙 おっちゃんにはここにこ笑う。ベンチが揺れる。
おっちゃんがベンチから転げ落ちる。駅員が駆けつける。

駅員（声） 大丈夫ですか。血が出ていますよ。ひどいことをするなあ。電車が来ても、飛び込んじや駄目ですよ。人がいっぱい迷惑するから。

電車の明かりが、轟音とともに通り過ぎていく。
遙 通勤、通学。ラッシュが終って、駅には人がまばらになる。朝から、おっちゃんと同じベンチに離れて腰かけていた女子高生が、何か決心したように立ち上がった。女子高生がおっちゃんを見下ろしていた。おっちゃんが笑顔を浮かべると、その子も笑った。

様々な女の影が、おっちゃんの周りを去来する。

遙 朝は女学生。昼は主婦。夕暮れは、会社帰りのOL、夜になると、酒場の女。娼婦もいた。みんな、引き寄せられるように、おっちゃんの周りに集まった。おっちゃんは何も言わない。ある日、少女が、

おっちゃんの左の掌と自分の右の掌を合わせた。

遙が掌を広げる。

遙 遊びだった。次に娼婦がおっちゃんの右の掌と自分の左の掌を合わせた。少しおっちゃんに触れてみたいと思ったから。

「心が軽くなったよ」少女と娼婦は同時に言った。

「一駅だけ、電車に乗ってみようよ。一駅で電車は空の下を走る。もう一駅乗ると海の駅に着くよ。海に舟を浮かべてみんな一緒に住もう」

遙とおっちゃんがfade-out 舞台の照明が海のイメージに変わる。数人の女性が下手からあらわれる。

女（多数） 帰りましょう、海へ。

舞台に霧がかかる。女達が静かに歌い始める。

海へ

海へ 私の海へ 私が生まれた海へ

海へ あなたの海へ あなたが生まれた海へ

帰りましょう

帰りましょう

私たちは海から来た

帰りましょう 海へ

下手から、おっちゃんが現れる。綱を肩にかけている。おっちゃんが引いているのは船だ。方舟だ。

海へ 私の海へ 私が生まれた海へ

海へ あなたの海へ あなたが生まれた海へ

帰りましょう

帰りましょう

私たちは海から来た

帰りましょう 海へ

女1 (突然。叫ぶ) 舟よ、小さな舟。釣り船かしら。波間に漂っている。誰かいるのかしら。誰もいないね。

女2 待って。何か動いている。

下手のベッドに遙が腰掛けている。

遙 寒い冬の海。小さな舟の中にいたのは私。毛布にくるまれた、生まれたばかりの私。掌にマジックインキで「はるか」と書いてあった。

遙が fade-out 白い服を着た女たちが舞台に現れる。舞いながら踊る。

海へ

海へ 私の海へ 私が生まれた海へ

海へ あなたの海へ あなたが生まれた海へ

帰りましょう

帰りましょう

私たちは海から来た

帰りましょう 海へ

海へ 私の海へ 私が生まれた海へ

海へ あなたの海へ あなたが生まれた海へ

帰りましょう

帰りましょう

私たちは海から来た

帰りましょう 海へ

上手から矢崎登場。女たちの間を歩く。女たちに

気づかない。次々に女たちは下手、上手へ別れて消

えていく。

矢崎 自殺常習者か……。あの子だと思っただけだ。

長いまつげ。真っ黒な瞳。ストレートな髪。(ビニ

ール袋から毛をつまんで見る）これは縮れているけれど。化粧気のない顔。

矢崎が立ち止まる。屋台の長椅子が舞台奥にある。

矢崎が近づく。のれんをくぐる。

矢崎 誰もいない。水でももらおう。

手をのれんの奥に入れる。

矢崎 水が一升瓶に入っている。貰いますよ、お水。

一口飲む。

矢崎 酒に似た水。もう一杯。

半分飲んでコップを置く。

矢崎 二十年以上も前になるかなあ。（ふっと息を吐く）。掌教の教祖と十七人の女たちが箱船に乗って、海をさまよい始めたのは。おれは教祖の過去を探った。教祖には七つ離れた妹がいた。（コップの酒を飲む）俺の、記者時代の俺のたった一つのスクープ。掌教の教祖の過去。「事故か過失かそれとも……」。

舞台に影。かくれんぼ。子供の声。

女の子（声） まあだだよ。

男の子（声） もう、いいかい。

女の子の影が横切る。

女の子（影）　まあだだよ。

女の子の影が消える。男の子の影に切り替わる。

男の子（影）　もう、いいかい。

男の子の影が消える。長持の影が現れる。女の子の影が現れる。

女の子（影）　まあだだよ。

女の子の影が、長持のふたを開ける。

女の子（影）　もう、いいよ。

女の子の影が長持の中に消える。蓋が閉まる。男の子の影が現れる。立ち止まり、周りを探す。

男の子（影）（小さく）もう、いいかい。

男の子の影が長持を見つける。長持のふたを開ける。中に消える。

矢崎　十歳と三つの兄妹のかくれんぼ。古い蔵の中のかくれんぼ。「もう、いいかい。まあだだよ」。

薄暗い蔵の中。長持のふたがボタンと閉まって……。

長持の中で何が起こったのだろう。男の子は長持のふたが閉まったように心を閉ざした。ボタン。

「へい、毎度の声」に矢崎が驚いて、コップを落と

しかける。

矢崎 おやじ、掌教って知ってるかい。古い話だね。そう、そう、ハーレム、ハーレム。そう、そう。でも、少女もたくさんいたからね。親たちが訴えて、少女拉致の疑いで、警察が入った。もう、一杯貰おうか。

酒を一気に飲み干す。矢崎が金とコップを置いて立ち上がる。

矢崎 教祖は責任能力なしで、すぐに釈放されたけれど、一気に、掌教は転落していった。俺の記事が教祖の背中を押したみたいで嫌だった。そんなことはもういいか。

矢崎の足下がふらつく。

矢崎 箱船に残ったのは、海で拾った女の子と、行くあてのない老婆。何も分かっていない教祖。

舞台が赤く染まる。

矢崎 箱船は火をつけられ、燃え上がった。俺も駆けつけた。漆喰の海に火の粉を吹き上げる箱船は悲しいほどに美しかった。写真も撮らずに呆然として眺めていた。

舞台が元に戻る。矢崎はふらつきながら、下手に歩く。遙が矢崎と歩調を合わせて歩く。遙が fade-out

矢崎 それから十年ちよつと。もう一つの悲劇が起こつた。(縮れ毛を見つめる)少女は女になった。

遙が上手に fade-in

遙 おっちゃんを知りませんか。

矢崎の周りを一周して、下手へ走る。矢崎の目が遙を追う。

遙 大きな人です。喋りません。時々大きなおならをします。でも、私にとって、とても、大切な人。

私の神様。

遙が矢崎を見る。

遙 おっちゃんを知りませんか。見かけませんでしたか。

遙が、矢崎に近づく。

矢崎 おっちゃんを探している？

遙がうなずく。

遙 掌の雪が消えたように突然、いなくなった。本当におっちゃんはいたのだらうか。いたよ。今もい

る、私の心の中にいる。おっちゃんを知りませんか。見かけませんでしたか。

舞台を駆け回る。息を切らして倒れる。ゆっくり起き上がる。

遙 おっちゃんがいなくなってから、私の時間は止まった。「希望の家」には忘れられた子供がいっぱいいいたよ。養子になる子もいた。帰った家で殺された子もいた。でも、私には誰もかまわなかった。私がないように。誰も私にはかまわなかった。無意味な、つまらない時間だけが過ぎていく。だから、無意味なつまらない時間は私が止める。

矢崎 やめろ。それは解決じゃない。

遙 あなたは誰。

矢崎 さつき会ったよ。フリーライター矢崎。

遙 レレレのおじさんに似ている。

矢崎 レ、レ、のレ。僕はダスキンおじさん。お掃除、お掃除、ダ、ダ、ダスキン、ピッカピッカ。やらすなつて。シリアスな場面なんだよ。

遙 レレレのおじさん好きだよ。

矢崎 ありがとう、それじゃレレレのおじさんでい

いよ。

遙 レレレのおじさんをやりたい。やってもいい。

矢崎 (いつの間にか箒を持っている) 君が、レレレのおじさんを……。やりな、いいよ。

矢崎が箒を遙に渡す。

遙 レ、レ、のレ。僕はダスキンおじさん。お掃除、お掃除、ダ、ダ、ダスキン、ピッカピッカ。

矢崎 (拍手をする) 上手い。俺より上手い。笑ったね。初めて笑ったね。笑顔がとても可愛い。

遙 もう笑わない。シリアスだから。

矢崎 可愛いくない。

矢崎が Fade-out

遙がベッドに腰かけている。

遙 「希望の家」を出て、コンビニを渡り歩いた。

やってくる人はお客様。私は店員。

「いらっしやいませ、こんばんは」

「千円からでよろしかったでしょうか」

「ありがとうございますました」

私はロボットになればいい。

死のうと思った時は、二ふたつき月前にコンビニを辞めた。

二カ月前に私がいたなんて誰も覚えていないから。死んで、死んで、また、死んで。それでも、死に切れない私。おっちゃん、おっちゃん。どこへ行ったの！

矢崎が fade-in

矢崎 今は何もない。全てのものは失われる。全ての時間は失われる。昨夜見た夢のように。だから、もう、いいんだよ。おっちゃんを探さなくても。

矢崎が、遙の両手を握る。遙が手を振り払う。矢

崎が fade-out

遙 レ、レ、のレ。僕はダスキンおじさん。お掃除、お掃除、ダ、ダ、ダスキン、ピッカピッカ。

泣きながら、気の済むまで繰り返す。

暗転

九 癒しの部屋

遙と一歩がベッドに腰掛けて向かい合っている。

遙 今日出かけないの？

一步 君と話している方がええんや。邪魔か。

遙が首を振る。

一步 君はいくつ？ 女の子に聞くのは失礼やけど。

遙 いいよ。二十歳^{はたち}。

一步 僕も二十歳。

遙 二月十六日生まれ。

一步 僕と^{おん}なじや。昭和元年二月十六日生まれ。

遙 同じ日に生まれた。私が生まれた本当の日は分らない。でも、同い年だね。

一步 君と話していると、なぜか懐かしい気がするんや。時代がちやうのに。

遙 私も。

一步 君も……。

遙 ずーっと一緒にいたような。小学校、中学校、高等学校。机の下に君はかくれていたよ。

一步 僕にはあまり思い出がない。頭が悪いんやから。せやけど……。君はいたよ。いつも教室の隅で。窓から外を眺めていた。

遙 それは中学校の頃だね。二年一組。窓の外から公園が見えた。おっちゃんを見ていたんだ。缶潰し

って知っている？

一歩 缶潰し？

遙 (手で二十センチぐらいを示す) これぐらいの大きさの道具。間に缶を挟んで潰すの。足で踏み潰すんだけど、おっちゃんは力が強いから、手で潰していた。

遙が立ち上がる。窓から外を見る。

遙 今も見えるよ。一歩、こちらへおいで。

一歩が立ち上がる。遙と肩を並べる。

一歩 あの人がおっちゃんか？

遙 そう。缶潰しで私を育てた。おっちゃんには仕事をしているって意識は多分なかった。

一歩 飽きへんかなあ。

遙 (笑う) 缶潰しが大好きだから、飽きない。缶はね、子供たちが集めてくる。誰も言わないのにおっちゃんの周りに缶を置くと嬉しそうに帰ってくる。

一歩 子供だけが心で話してるんや。

遙 そうだと思う。

一歩 また、来たよ。三本も抱えている。潰し終わ

ったら、また来たよ。子供は次々やってくる。

遙 おっちゃんは黙々と缶を潰す。

一歩 見ていても飽きへん。

遙 見て。あれが私。

一歩 かわいいね。

遙 かわいいでしょ。私を見ると、おっちゃんは立ち上がる。おっちゃんの周りを私はぐるぐる回る。

一歩 楽しそうやね。

遙 誰にだって幸せな時間はある。短かったけれど。

私は幸せだった。

一歩 消えた。

遙 一緒に住んでいたおばあさんが亡くなってから、私が家事をしたの。料理はうまかったのよ。時々家にやって来る民生委員のおじさんも、遙ちゃんの料理はおいしいって言っていたよ。おっちゃんもおいしそうに食べていた。(一歩を見る) どうしたの？
聞いているの。

一歩 聞いているよ。聞こえないんだ。

遙 何が？

一歩 音矢の「君が代」が。今の時間はいつも歌っ

ているのに。行ってみる。

一歩が下手に向かって駆け出す。

下手から、一歩が現れる。ドアを掌で押す。ゆっくりと体が吸い込まれる。上手を見上げる。

十 音矢の部屋

一歩 (叫ぶ) 音矢!

「七^{しち}生^{しょう}報^{ほう}国^{こく} 天皇陛下万歳」の垂れ幕が天井から降りてくる。下手に遙が fade-in

遙 (つぶやく) 君は音矢を見た。

一歩が、敬礼をする。

一歩と遙が fade-out ダスキンの男が下手より、掃除道具を持って登場する。

ダスキンの男 レ、レ、のレ。僕はダスキンおじさん。お掃除、お掃除、ダ、ダ、ダスキン、ピッカピッカ。

一心不乱に掃除をする。

ダスキンの男 掃除をやって四十年。俺は掃除なんて大嫌い。でも、仕事なのだよ。生きるために食べるためにやる。タレントなんかは、僕は平凡なサラ

リーマンにはなりたくなかったなんてぬかす。仕事に生き甲斐。ふうんだ。好きな仕事がしたい。夢のある人生。ふうんだ。（叫ぶ）世の中、支えているのは、つまらない仕事なんだよ。

また、一心不乱に掃除をする。一瞬掃除を止めて何か考える。急に思い出したように。

ダスキンの男 さあ、あの落書きを消さなきゃ。

モップで「七生報国 天皇陛下万歳」の文字をこする。

ダスキンの男 ピッカ、ピカだ。みんな消えちやえ。

暗転

十一 癒しの部屋

遙と一歩がベッドに腰を下ろして向かい合っている。

一歩 君は心の中に鍵をかけてる。一つ。

遙 鍵？

一歩 閉じられた時間。君はその時間を消してしまいたい。そのために、何度も死のうとする。

遙 鍵を開ければ……。

一步 ……。

遙と一步が見つめ合う。遙が小さく言う。

遙 鍵を開ければ、私は死ぬる。

遙がゆっくりと立ち上がる。窓に向かう。一步の

視線が遙を追う。一步が fade-out

遙 遠い昔のようで、昨日のようで。

窓のカーテンを開ける。

遙 あの時、急におなかが痛くなった。トイレに行

ったら、おしっこのところから血が出ていた。保健

室へ行った。名前は忘れたけれど優しい先生だった。

「女の子は誰でも赤ちゃんを産む体になるのよ」

「私が赤ちゃんを産む！」 「驚くことじゃないよ。」

君も生まれてきたのだから。先生が説明しているの

に、君は窓の外ばかり見ていたから」頭をゴシゴシ。

「先生、帰っていいですか？」 「いいよ。でも雨が

降りそう。傘は持っているの？」 私は首を振る。

「返すのはいつでもいいよ」 私は、赤い傘を1本借りた。

暗転

落雷。稲妻。傘を差した遙が下手から入ってくる。

十二 おっちゃんと遙の家

遙 ただいま。

遙 が傘をたたむ。上手におっちゃんが fade-in

遙 おなか痛くなって、早引きしてきたよ。もう大丈夫。ご飯の支度をするね。

遙 が台所に立ち、包丁を取り出す。おっちゃんが小さな声を出す。遙がおっちゃんの方を見る。

おっちゃん もう、いいかい。

遙 が笑う。兄妹の影が舞台を横切る。

遙 まあだだよ。

おっちゃん もう、いいかい。

遙 まあだだよ。

遙 が包丁で野菜を切るマイム。

おっちゃん もう、いいかい。

遙 まあだだよ。

おっちゃん もう、いいかい。

遙 まあだだよ。

おっちゃん もう、いいかい。

遙 「もお」という感じで）まあだだよ。

突然、おっちゃんが立ち上がる。背後に女の子の影が走る。女の子が長持の中へ入る。

おっちゃん （叫ぶ）もう、いいかい！

おっちゃんが遙を背後から抱きしめる。顔を遙の肩に埋める。

おっちゃん （小さく）は・る・か。

遙がおっちゃんの手から抜け出し。おっちゃんが遙を突き飛ばす。おっちゃんが遙に覆い被さる。服を脱がせようとする。次の瞬間、遙がおっちゃんの胸に包丁を突き刺す。おっちゃんがゆっくりと倒れる。遙が馬乗りになり、両手で包丁を握り、突き刺す。

遙 二回。

また突き刺す。

遙 三回。

また突き刺す。

遙 四回。

次々に突き刺す。

遙 五回、六回、七回、八回、九回。……。十二、十三、十四、十五。

遙がバサッとおっちゃんの胸に体を投げ出す。頬が血に染まる。

遙 もう、いいよ。もう、いいよ。

遙がおっちゃんのまぶたを閉じさせる。

遙 もう、いいよ。

遙が、おっちゃんの胸を広げる。遙がセーターを脱ぐ。乳房を裸のおっちゃんの胸に押しつける。遙の目から涙があふれる。包丁を持った手はゆっくり刺す動作を繰り返す。ライトが包丁だけにあたる。

他は、fade-out

遙 十八、十九、二十、二十一、もう、いいよ。二十二、二十三、二十四、二十五。もう、いいよ。

雷鳴。稲妻。暗転。

下手。遙が立ち上がる。服を直し、ゆっくりと髪をかきあげる。

上手。おっちゃん。特攻隊の服に着替える。背後に巨大な方舟の影。おっちゃんも、遙も影絵になる。テーマ曲「時間」が小さく流れる。

暗転。

十三 癒しの部屋

背を向けた遙が窓際に立っている。飛行服を着た
一歩がベッドに腰を下ろしている。遙が振り向く。

遙（静かに）私は戦争を知らない。でも、私の心
の中はいつも戦場だった。

飛行機の音。一歩が航空帽をかぶる。

一歩 そろそろ、行かんと。

遙 帰っちゃいやだ。

一歩 だんだん、僕が薄くなってきている。もうす
ぐ消えてしまうよ。昭和元年二月十六日。僕が生ま
れた日。昭和は十二月二十五日から始まった。ネッ
トで調べたよ。遙、僕が生まれた日は存在しない。
失われた時間だ。

遙が一歩に近づく。

一歩 飛行機の音が聞こえ始めている。

遙 死ぬために帰るのだね。

一歩（少し笑う）特攻隊だから。さあ、行くよ。

遙 君に会った。君にもし会わなかったら、私は私を知らないままで、死んだ。

一步 遙。僕は君に会いにきた。もし、君に会わなかったら、僕は、失われた時間を永遠にさ迷っていた。

一步が立ち上がる。遙が駆け寄る。一步にしがみつく。唇をあわす。そっと、一步が遙の体を離す。

第二ボタンをちぎり取る。遙の手に握らせる。

一步 僕の形見やねん。(静かに) 天皇陛下万歳。

飛行機の音。

一步が Fade-out 上手から矢崎が現れる。

矢崎 特攻隊は？

遙 帰った。

矢崎 帰った？ いなくなったのは良いことかもしれない。ここには彼の居場所はない。彼は万福寺一歩じゃなかった。別人だよ。

遙 そんなことを調べていたの。

矢崎 君も調べたよ。

遙 私を？

矢崎 一步と君のDNAは一致した。

遙 私と一歩が……。

矢崎 同一人物ってこと。一歩は遙の影法師。一歩だけじゃない。みんな遙の影法師。

遙 (間) 分かったわ。何もかもが。みんな私の影法師。みんな私の影法師。

遙が静かに倒れる。

暗転

十四 救急病室

看護師と医師。ベッドの上には誰もいない。医師が脈を取るマイム。医師が時計を見る。看護婦がカルテに書くマイム。

医師 午前五時十三分。いいですね。

看護師が頷く。

医師 結局は誰も来なかったね。後は当直に任せて帰りましょう。

医師が手を洗うマイム。

医師 不謹慎だけど、七回目でやっと本懐をとげたというところかなあ。

医師が手を拭く。

医師 深夜食堂って知っていますか？

看護師 いいえ。

医師 夜の十時から朝の六時までやっているんです。

軽いフレンチなんかあって結構いけますよ。今から、一緒に行きませんか？

看護師 もう少しここにいます。

看護師がかがむ。

看護師 あれ、何か握っている。

医師 まさか、何度も脈を計ったのに。

看護師 ボタン……。

医師が Fade-out 看護師がボタンを眺めながら、窓に近づく。カーテンを少し開ける。ボタンをかざす。

看護師 もうすぐ夜が明けるわ。

テーマ曲「時間」が静かに流れ始める。

時間

時は流れる

流れ落ちる砂のように

掬っても、掬っても

時は次々に消えていく

私が過ごしたひととき一時

私が過ごしたひび日々

私が過ごしたとしつき年月

今というとき時は帰ってこない

子供は大人になり

年を取り

やがて みんな 旅立つ

また 子供が生まれ

新しい時が歩き始める

時は旅人

人は時と共に旅に出る

(間奏)

時は見えない

いつか見た夢のように

追いかけても、追いかけても

時は次々に消えていく

あなたと過ごした一時

あなたと過ごした日々

あなたと過ごした年月

今という時は帰ってこない

子供は大人になり

年を取り

やがて みんな 旅立つ

また 子供が生まれ

新しい時が歩き始める

時は旅人

人は時と共に旅に出る

幕

登場人物

青田良（計算課）

山瀬久美子（庶務課。良と同期入社）

吉田光（三八才）

計算課社員

山村（課長四五才）

佐々木（五五才。勤続35年）

関（四三才。勤続25年の主任）

岡本（三八才。勤続20年）

山田三三才。（勤続10年の女子社員）

アクセスシステム社員

社員A、B

その他 声のみ。

開幕前

闇の中で何か動く気配がする。算盤を振る音。
ザツ、ザツ、ザツ。徐々に大きくなり、突然、算
盤の音がやむ。幕が開く。

壺 縁日の夜

祭り囃子の音が聞こえる。舞台の奥は計算課。薄
暗い。算盤を弾く社員たち。算盤で肩を叩く。電
話を取る。上手から、良と久美子が登場する。舞
台中央で、二人が立ち止まる。

久美子 蛭を売っているよ。

夜店の男（声） きれいよ。持ってみな。

久美子が、受け取った虫籠を目の高さに上げる。

久美子 光っている。

良 買う？

久美子 いいよ。すぐに、死んでしまうから。

夜店の男（声） 一週間は楽しめるよ。水だけで生きるからね。霧吹きをおまけにつけて千円だ。

良が金を払う。

良 二、三日経ったら、逃がしてやろうよ。

久美子 うん。

良 でも、都会じゃ居場所がないかもしれないなあ。

久美子、虫籠を見つめている。そのまま、下手に移動する。

久美子 （叫ぶ） あっ、また、光った。

良も、虫籠に顔を寄せる。

久美子 きれいなね。

舞台奥の計算課が明るくなる。職場の喧噪。電話

の音。算盤をはじく音。

式 計算課

関、山田、岡本、佐々木。良が下手から現れる。

関 あほた。

良 はい。

社員がどつと笑う。

山田 (笑いながら) 青田君でしょ。名前ぐらいち
ゃんと呼んであげて。

関 通じりやいいの。ちゃんと返事してるじゃない。

俺、カツ井ね。

良がメモを取る。

岡本 俺は、焼きそばと飯大。それと。

良、岡本に近づく。

岡本 ついでに煙草。

良 ハイライトですね。

岡本 (慥然と) そうだよ。いちいち言わすなよ。

山田 あら、B5ノートがないわ。鉛筆、ノート、

消しゴム、ボールペンは計算課の命よ。切らさないできちんと補充しておくこと。青田君、君の仕事でしょ。

良 後で、庶務課から。

山田 後では遅い。

良、下手に駆け出す。下手に、久美子。

良 山瀬さん、B5ノート。

久美子 えっ、はい。

ノートを渡す。

良 ありがとう。

良、背を向けて駆け出そうとする。

久美子 青田君。

良 えっ。

久美子 何でもない。

良、笑顔を返す。山田のデスクに駆け出す。

良 遅くなりました。

山田、無言で受け取る。

良 佐々木さん電話をお借りします。

佐々木 どうぞ。

佐々木は、他の社員と違って電卓を人差し指で叩いている。良、受話器を取る。

良 光物産、計算課です。ラーメン2つに、カツ丼

一つ、焼きそばとライス大盛り、昼定食2つ。

良、受話器を置く。

佐々木 わるいね。昼休みにショートピースを2つ

頼むよ。

良 はい。

佐々木 大卒さんにこんな事をさせていいのかなあ。

良 三流大学ですから。

佐々木 私なんか、専門学校だよ。

佐々木、煙草を吸う。煙をため息と一緒に吹き出す。

佐々木 それも夜間だ。それに、みんなのように算盤が出来ない。仕事は算盤の方がずっと速いよ。

電卓専門。みんな人差し指の佐々やんって馬鹿にしている。君もだろ。

右手の人差し指を良に見せる。

良　とんでもない佐々木さん。僕も算盤、出来ませ
んよ。

算盤の音が少しずつ大きくなっていく。算盤を振
る音になる。下手にスポット。台車に段ボールの
箱を乗せて、アークシシステムの社員Aが入って
くる。後から、キャスター付きのデスクを押して社
員Bが続く。

社員A　すいません、道をあけてください。

男達は箱の中から、部品を取り出し、運び込んで
きたデスクに手際よくセットし始める。

関　何だよ、それ。

社員A　コンピューターです。

関　コンピューター？　俺には箱にしか見えない。

社員A　まあ、箱ですけれど。

山村と吉田が入ってくる。

山村 みんな集まってくれ。

職場の喧噪はやまない。山村が手を叩く。ぞろぞろと立ち上がり、気乗りしない感じで集まってくる。

山村 えっと。(間)。お名前は？

吉田 私のですか？

山村 ええ、当然。

吉田 アークシSTEMの吉田です。これで、よしだ。

良だけ笑う。

吉田 (嬉しそうに) うけた。

山村 それじゃ、吉田さん説明してください。

吉田 これは計算機です。

吉田、言葉に詰まる。ぼんやりと目を宙にさまよ

わせている。

岡本 はやくやってよ。

関 忙しいんだよ。

吉田 算盤の代わりと。

関 (いらつきながら) これが俺達の仕事をするつていうの。

吉田 一部分です。主に計算です。みなさんのようにご飯は食べません。ついでながら、うんこもしません。

山田 下品。

吉田 (激怒する) 下品? あんたうんこしませんか?

山田 なによ、この人。

山村 あの、う……はいいから。話を進めて。

吉田 重要な問題だと思えますが。僕なにか下品なこと言いましたか。

山村 まあ、まあ。

吉田 すいません。どうでもいいことでした。皆様方のお仕事が計算だけでないのは、よく理解して

いるつもりです。計算機はあくまで仕事の一部
分をやるだけです。それに、この機械は、あくまで
も当方の都合でお願いしたわけでありまして、ご
協力願いたいのです。

岡本 謝礼は出るの？

吉田 製品化されましたら、それなりに。

岡本 モルモットになる時間はないなあ。

吉田 使っていただいて、こんな所がわるい、ここ
をこう変えたらどうかとか、現場の意見を私ども
は期待しているのです。（間）。課長さん、さっ
き、私「一部分」って言いましたっけ。

山村 仕事の一部分って。

吉田 訂正します。うんこを除いて「全てに」。

山田 （あきれたように）あなた、しつこいね。

吉田 自分の言葉に責任を取っているだけです。

関 俺達の仕事を全てこの箱がするって言うのか。

吉田 ええ、まあ。

社員の、あきれたような声。「仕事だ、仕事だ」
という声も混じる。自分のデスクに戻る。再び、

算盤の音。電話の音。

暗転。

参 計算課

コンピューターの前に、良が腰掛けている。無音。
社員は静止している。

良 コンピューターのことを社員は箱と言った。巨大なダンボール箱に入ってきた何の飾りもないアイボリー色の箱。一週間経っても、箱を触るものは誰もいなかった。机がなかった僕のデスクになった。

人が動き始める。

山田 青田君、コーヒー。

良 はい。

岡本 俺も頼む。ミルクなし。(伸びをする)休憩、

休憩、働き過ぎだよ俺たち。

山田 専業主婦にでもなるうかなあ。

岡本 いいよなあ、そんな手があつて。

山田 でも亭主の稼ぎだけじゃね。

山村 私もコーヒーをたのむよ。

良 はい。

良、椅子から立ち上がる。上手から吉田が現れる。

吉田 コーヒー、十分待って下さい。

関 部外者が……。

吉田、ディスプレイを指でなぞる。埃がついた指にふっと、息を吹きかける。

吉田 どうですか、調子は？

良 使っていません。使い方を見せてもらっていないから。

吉田 説明書を入れておいたから、いいかなあつて。

吉田、抽斗を開ける。説明書を取り出す。良、説明書を覗き込む。

良 おそろしく下手な字ですね。説明の説がひらがなだ。

吉田 分かればいい。でも、あなた、素直だなあ。コンピューター向きですよ。

良 そうですか。

吉田 素直が一番。さて、スイッチを入れて下さい。
(けたけたと奇妙な笑い声を出す) スイッチ入れなきゃ、ただの箱ですから。

良 これですか。

吉田 それはメイン・スイッチです。メイン・スイッチを最後にしてもらえたら、他の順番はどうでもいいです。

良、メイン・スイッチを入れようとする。

吉田 (怒鳴る) それが最後って言うてるだろう。

良 (弾かれたように) はい。

吉田 スイッチの入れ方で記録が消えたって話があります。幽霊みたいに、ふっと、データが消えてしまう。宇宙線が原因かもしれない。それとも、急に電気が通って、コンちゃんがびっくりしたりして。感電したあなんてね。(けた、けた笑う)。

関 紙に書くのが一番だ。

吉田 (声を潜める) 自分が機械の代わりをしているのを気づいていないんですよ。

吉田、デイスプレーを叩く。

吉田 まあ、こんなのはまだおもちゃですよ。十年後には、もっとすごいのが出来てますよ。この部屋も静かになる。(声を潜める) そろばんの音って嬉しいですね。

山田 コーヒー、飲みたいなあ。

吉田 入力が終わったとして、このコピーというボタンを押してください。OK表示が出たら、この裏側にあるレコード盤のようなものを抜き出してください。

吉田、フロッピーディスクを抜き出す。

吉田 はい、この中にコンピューターの記録が全てコピーされました。このジャケットに入れて、なるべく、機械から離れた場所に保存してください。理由は分かりますね。誰かが（関の方を見る）、機械にコーヒーをぶっかけても、記録は消えない。関 気に入らないなあ、あんたの態度。

吉田、視線をフロッピーディスクに戻す。

吉田 （小さく）吠えるなよ。

関が立ち上がりかけるが、山田に止められる。

吉田 それと、この部分は手で触らないように。

（猥褻な連想を混じり込ませて）敏感な部分なん
でね。それじゃ、会社の資料をインプットしまし
よう。

良　ちよつと、待って下さい。コーヒーを。

吉田　少なくとも、他人のコーヒーをいれるより大切な仕事ですよ。

関が立ち上がる。

関　職場には職場の掟があるんだ。そろばんが出来ない奴は雑用をする。大卒なんか関係ない。計算課の掟だ。

岡本　そうだ。そんな機械、おもちゃだ。

山田　競争しましょうか。1から50まで順番に足しましょう。

吉田　いいですよ。プログラムを作ります。

吉田、キー入力する。

吉田　OKです。

山田・吉田　55。

良　同時。

吉田　じゃ、1万まで。（間）。五千万五千。

岡本 インチキだ。現実には、無意味な計算だ。

山田 そうよ。

山村 みんな静かに。これはトライなんだ。協力しようじゃないか。何を苛立ってんだ。

関 苛立っている？ 自分の仕事が馬鹿にされているようでね、なんか面白くないすよ。俺達はプロなんだ。

山村 そうだ、プロだ。計算課は、我が社の中枢であることには変わりがない。

良 とにかく、コーヒーをいれます。

山村 いいよ、青田君。続けなさい。

暗転。

四 計算課

吉田と良だけになる。良はディスプレイに向かって入力をしている。

吉田 いっぺんに静かになっちゃった。ちよつと窓

を開けますか。

良 開かないですよ。

吉田 何故？

良 知らない。

吉田が窓際に行く。良も横に立つ。

吉田 開かずの窓か……。あれっ、雨が降ってきた。

ビルに囲まれて、平屋が30件ぐらいあるなあ。

いや、50件かな。日当たりはよくないですね。

ここ、昔遊郭があったって聞いたなあ。

良 知らないすよ。猫がいるなあ。

吉田 どこに？

良 ほら、屋根の上に。一匹、二匹、沢山いますよ。

吉田 目がいいんだなあ。

良 勉強しないから。

吉田 それは一緒だ。あっ、いるいる。よく太っているよ。

良 野良猫ですよ。いいなあ、自由で。

吉田 おーい、雨に濡れて、風邪引くなよ。

良 吉田さん優しいですね。

吉田 (照れる) そんなことないよ。

吉田 女でも、猫でもいいから、帰りに寄ろうかなあ。

吉田、大きく伸びをする。

吉田 高いところって気持がいいなあ。それに大きな窓があつてさ。

良 俺、あまり窓の外は見ないですよ。この部屋には季節がないから。雨の音も聞こえないし。コマネズミみたいに走り回って一日が終わる。いつも同じ季節の中にいるみたいです。

良、席に戻ってキーを打つ。

吉田 確かに、雨の音が聞こえない。うちの事務所と大違いだ。雨の音どころか、雨が吹き込んでくる。

良 (笑いながら) 傘をさしてプログラムを作つて

るんですか？

吉田 まさか。ラーメン食いながら作ってますけどね。

良 楽しいですか？

吉田 楽しい？ 何が楽しいのか分からないけど、コンピューターは俺を騙さないもん。あっ、商店もあるなあ。あれは銭湯かなあ。ここ何階ですか。

良 八階です。

吉田 しじまの窓に雨が降る。

良 吉田さん詩人だなあ。

吉田 詩人ですよ。詩人だからプログラムが作れる。同じなんです。詩を作るのも、プログラムを書くのも。そうじゃなくなったら……。

良 そうじゃなくなったら？

吉田 俺、やばいかしれない。そう思わない？

良 分からないですよ。吉田さんのことはそんなに知らないし、僕は言われた通りやっているだけだから、この箱の中で何がどう動いているのか全く知らない。結果だけしか見ていない。

吉田 いずれみんなそうなりますよ。何が動いてい

るのか分からなくなる。見えなくなる。

吉田、もう一度窓を開けようとする。窓が開く。勢いで倒れる。雨の音。吉田が窓を急いで閉める。

吉田 (ふと) 何故、雨が降るんだろう？

良 さあ…。

吉田 この世の中、全部出来すぎてるよ。

良 あっ、間違った。吉田さん、黙っててくれますか。

吉田 誰かが作ったような気がする。

良 (キー入力する手を止める) 誰か？

吉田 何かかもしれないけど、そんなこと考えたことないですか。

良 ないですよ。

吉田 出来すぎてるんです、何もかも。全てつじつまが合っている。人間から、細菌にいたるまで。

銀河から原子にいたるまで。誰かがきっちり作ったみたいだね。僕らは小さな箱の中で飼われているのかもしれないですよ。ペット。そう、ペッ

ト。きっとパパが、バースデープレゼントに買ってやったんだ。

良 ちよつとついていけないですけど。

吉田 色即是空 空即是色

良 今度はお経ですか？ でも凄いなあ。コンピューターからお経まで。

吉田 (吉田照れる)。そんなことないですよ。聞きかじりですよ。

吉田、少しだけ、窓を開ける。

吉田 雨が降るわけも知識として知っている。雨が降らなければ、大変なことになる。それも理解できませんね。でも、何故、雨が降るんだろう？

良 何故？ 雨は降るから降るんですよ。

吉田 アインシュタインの特殊相対性理論。E = MC²の二乗。これも美しすぎる。おかしいと思いませんか？ ひよつとすると、私たちは精巧なロボットかもしれない。細胞は部品、脳は中央演算装置。神経は電線。どこかにバッテリーがあるんだ。

命というバッテリーが。(叫ぶ)みんな、こいつ
とおんな同じだ。

吉田、キーボードを両手で押さえる。

良 吉田さん……。コンピューターが暴走していま
すよ。

吉田の顔を見上げる良。下手から、久美子が入っ
てくる。

久美子 まだ、明かりがついていたから。

良 もう少しだよ。庶務の山瀬久美子さん。去年入
社の同期ですよ。

吉田 アークシシステムの吉田です。もう吉田。

久美子 えっ？

吉田 ショックだ。通じない。

久美子 お弁当、買ってきたの。

久美子、デスクに弁当を置く。

良 ごめんね。雨に濡れなかった。

久美子 大丈夫。

吉田 すいませんねえ。

久美子 あもう。一人かなあとと思って。

吉田 私、釜戸屋のほっかほっか弁当、大好きですよ。

久美子 (あきらめて) お茶を入れてきます。

久美子、下手に消える。

良 (独り言のように) 彼女、僕が一人で残業して
いると思っていたのかなあ。

吉田 (ハツと気がつく) そろそろ、私、帰ります。

良 割り箸がありますから、三人で食べませんか。

良が割り箸を取りに行く。吉田が机の上のはさみ
を取る。弁当の紐を切る。

良 はさみを使うほどでもないのに。紐は簡単には

どけますよ。

吉田 えへへ、紐をほどくのが苦手なんですよ。

（はさみを見る）はさみよりコンピューターの方がよっぽど人間くさいですよ。考えてくれる道具だからね。それに、コンピューターは人を裏切らない。（間）でも、世の中がすっぽりこいつになっってしまったら、生きていけないなあ。

良 世の中がすっぽり？

吉田 言い換えれば、私がこの箱の中に入ってしまったら。

良 分からないですね。

吉田 二人とも、もう、片足が入っているのかも知れないよ。（ふと思いついたように）彼女、遅いなあ。一つ余っちゃうなあ。お茶は。

良、あきれたように吉田を見て、弁当を吉田に渡す。二人が向かい合って弁当を食べる。

吉田 そのかまぼこ。（箸でつまむ）好きなんですよ。

良 意外とあつかましいですね。

吉田 卵焼きも好物で。青田さんは嫌いですか？

良、自分の弁当を差し出す。

良 一つ質問していいですか？

吉田 ええ。

良 入力は機械でも出来ますか？

吉田 末端まで電子化すれば可能ですね。

良 算盤がなくなるのか……。

吉田 算盤？ ああ、あれね。あれはもうすぐなくなりそうですよ。

良 (キーボードを撫でる) コンピューターの入力もいずれ機械がやってくれる。

吉田 それは、しばらくはなくならないなあ。私たちは頭脳というとてもない回路を持っている。

(吉田、額を指さす)。人間が必要です。マンパワーを考えないシステムには巨額な金がいります。

それよりも、人の回路を定年まで使った方が安上がりだ。

窓に灯りが点滅する。

吉田 ホタルだ。

良 ホタル？ 季節も違うし、こんな都会でホタル
がいるわけがない。

吉田 新種かも知れない。

良 新種ですか……。 (笑う)。多分車のライトで
すよ。

吉田 でも、きれいだなあ。

良 都会の蛍。

吉田 あんたも詩人だ。

暗転。

五 計算課

キー入力する良。ディスプレイを肩越しに見る吉
田。

関 あほた。

山田 お勉強中よ。

岡本 そうか。お給料もらって勉強とは、いいご身分で。

吉田 現物をインプットしましょう。

良 これは……。

吉田 佐々木さんの担当です。現金出納簿5の1ですか。

佐々木、一瞬目を上げて、良を見る。すぐに目を逸らせて、机の上の書類に目を落す。

吉田 課長の許可は取ってあります。(間)どうぞ。

良、キー入力をする。

吉田 完了しましたね。それでは、書類作成のキーを、1番ですね。押してください。佐々木さん、十月分の資料お願いします。

佐々木が立ち上がり、書類を持って吉田に近づいてくる。

吉田 すいません。

吉田、プリントアウトされた用紙を抜き取る。

佐々木の資料と見比べる。

吉田 (間) 合わない。ルーチンが違っていたかなあ。

佐々木 交通費が抜けているんですよ。月報を作った後だったもんで……。でもね、次の月に入れてます。きちつと

吉田 いや、いや、合えばいいんですよ、合えば。

吉田が消える。岡本が近づいてくる。背後から作業を観察する。そして、去っていく。山田が続く。関が良に近づいてくる。

関 青田君、102番の資料を出してくれ。

良 えっ？

山村 関君ちよっと待ってくれ。

山村が二人に近づく。

関 参考にするだけですよ。箱がどの程度の仕事を
しているか知りたいだけですよ。

山村 君には関係のないことだ。

関 関係ない。同じ仕事を機械と人間にやらせて、
天秤に掛けてるんですか。

山村 君は機械に取って代わられるような仕事をし
ているのかね。

関、良を一瞥して、席に戻る。上手から、吉田が
現れる。

吉田 やっ。

良、無言で会釈する。

吉田 何かあったんですか？ いやに静かだなあ。

良 別に。

吉田 キー入力が速くなりましたね。

良 数字だけですから。

吉田 何か問題はありますか？

良 今のところは。

吉田 梅が咲いてましたよ。（歌う）梅は咲いたか、

桜はまだかいな

吉田、歌いながら社員を見回す。社員は一斉に目を伏せる。「期末なんだよ、バーカー」という声が飛んでくる。

吉田 そんな雰囲気でないか。（良の肩を抱くようにして、声を落とす）一人で全員の仕事、やっつんですからね。作成した資料を見られちゃダメですよ。抽斗に鍵をかけてますよね。

良 ええ。

吉田 ちよつと、私の仕事場を見学に来ませんか？

車で十分、歩いて五分。走って一分。

良 課長に。

吉田 電話で了解取っておきました。さあ、行きましよう。

上手が吉田のオフィスに変わる。

六 アークシステムオフィス

部屋の中央にコンピューターが3台。細長いテーブルがあり、その上に本や書類が乱雑に置いてある。週刊誌、スポーツ新聞もある。どぎつい漫画も混じっている。下手に巨大な段ボール箱。観客席に向かっていている面は開いている。

吉田 汚いところで申し訳ない。掃除をしよう何て殊勝な奴は誰もいないんだから。

ラフな私服を着た男がいる。

社員 A (キーボードを叩きながら) また、落ちち

やったよ。

社員 B 昨日の酒が残ってるんだよ。

吉田 こいつら、給料なんてないんですよ。みんな出来高払い。0円の月もあれば、百万稼ぐ月もある。

良、下手の箱に気づく。

吉田 ああ、あれね。あそこに入って、考えるんですよ。

社員 A 嘘だ、ほとんど寝ている。

吉田 ばらすなよ。ちよつと入ってみますか。

良 いや、結構です。

吉田 居心地はいいですよ、まあ、何事も体験。

良、箱の中にはいる。蹲る。

良 どういう仕掛けなのか、音が消えた。何処までも続く闇の中に取り残されたような気がする。

吉田 そこにある電話を取って下さい。

良 電話？

吉田 足下にあるでしょ。

良 (紙の筒を拾う) これ？

吉田 糸電話。外との唯一の通信手段です。

良、苦笑いしながら、糸電話を耳にあてる。吉田、糸電話で話しかける。良が話す時は、耳に当てる。

吉田 聞こえますか。

良 ええ。

吉田 何か話して下さい。

良 何かあって？

吉田 好きな食べ物？

良 牛井かなあ。安くて早くて腹持ちがいいし。

吉田 今日のウンコは？

良 また、それですか。

吉田 (語気を強める) そろそろ本当の事を言ったらどうだ。

良 ウンコの話が本当の事ですか？

吉田 いや、ゴメン。何が本当の事か分からないん

ですよ、僕は。

良 僕も分からないですよ。

吉田 そうですか、他人はみんな分かっているのか
と聞いていた。(間)。そこで、つまらん事を考
えてるんですよ。たとえば、夢についてとか。

良 夢？

吉田 夢が現実で、現実だと思っている世界が、夢
だとしたら。

良 不思議なことを考えますね。夢が現実に置き換
わるだけですよ。

吉田 そうか。もう一つ現実的な問題として。

良 (笑う) 夢の方ですか。

吉田 寝てみる夢と違う方です。子供らに聞くじゃ
ない。「君の夢は何？」なんてね。あの夢。(照
れる)。機械に言葉を喋らそうと思っているん
です。

良 機械に言葉を。

吉田、糸電話をコンピューターに向けて、キーボ
ードを叩く。

機械（声）　こんばんは。

吉田　（糸電話に向かつて）聞こえた？

良　ええ。

吉田　まだ、まだ、人の声にはほど遠いですが。

社員A　そんなことをしなくたって、テープレコー

ダーがあるんだよ。

吉田　（ムキになって）あれは人間の声だ。俺が言ってるのは、機械が喋るんだ。自分の意志で。

社員の笑い声。良以外は退場。計算課の社員と入れ替わる。良は箱の中のまま。

良　箱が来てから、半年、僕にとって、平穏な職場での時間が過ぎて行った。彼等が僕のことを

「箱」と呼んでいる。「箱」か……」

下手から、久美子。

久美子　青田君。

山田 箱の彼女のお出まし。

岡本 箱の彼女なら、玉手箱（笑い）。

良 ああ、山瀬さん。

久美子 お昼、一緒に。

良 もう少し。

久美子 そう。

久美子が下手に消える。

良 機械が入れ替わった。そのたびに少しずつシステムが変わった。コピーを別の場所に保存する必要もなくなり、作成資料にグラフが加わった。それに反して、箱の大きさは小さくなった。

少し小さな段ボール箱が、舞台下手から、現れる。

良、箱から出て、その箱の中に入る。

良 箱と職場は幸せな平衡を保っているように思われた。だが、四月、職場を突然嵐が駆け抜けていった。二人の社員が辞めた後、補充はなかった。

次ぎに閑さんが閑職に追いやられた。嵐は止まな
かった。六月には山田さん、岡本さんと辞令が続
いた。山田さんは退職し、岡本さんは地方にとん
だ。定年に近い佐々木さんと僕だけが残った。

下手から、佐々木。電卓を叩き始める。思い切っ
たように立ち上がり、良のそばに来る。

佐々木 帰りに一寸、一杯やろうか。

良 あまり酒飲めないです。

佐々木 相談があるんだ。

七 割烹

佐々木が上手の椅子に腰を下ろす。良が箱から出
て、佐々木の隣の椅子に腰を下ろす。

良 高級な店ですね。はじめてですよこんな店。

佐々木さんはよく来られるんですか？

佐々木 まあ、まあ、何でも注文してくれていいよ。

私の奢りだから。俺はと。品書きを見る。本日の
おすすめは「海老のおどり」か。それをもらおう
か。君は？

良 ええ、私も。

佐々木が速いピッチでビールを飲む。

佐々木 俺と君だけが残っちゃまったねえ。

良 ええ。

佐々木 仲良くやろうよ。

良 はい。（無邪気に）おいしいです。こんな食
べたことないなあ

佐々木 そう、それはよかった。

佐々木がビールを一気に飲み干す。

佐々木 実は頼みがあるんだ。君の作成資料を参考
にしたいんだ。

佐々木、額をカウンターにぶつけるように頭を下

げる。

佐々木 楽をしようというんじゃないんだ。(間)

私も苦しいんだよ、家のローンも残っている。子供はまだ学生だ。辞めるわけにはいかない。

店員(声)へえ、いらつしやい。

佐々木 俺がやっているのは、石を積んで、崩す、また積む。また崩す。そんな作業だよ。答えは出ている。正確な答えが。

良 だけど、僕が見せるわけには。照合の意味がなくなります。

佐々木 とつくに終わっているんだよそんなこと。

君が一番よく知っているだろ。間違うのはいつも私だ。

佐々木、額をカウンターにぶつけるように頭を下げる。

佐々木 率直に言うよ。机の抽斗に鍵をかけないで帰って欲しい。たまたま、君が忘れる。抽斗を開

けるのは私だから、君には責任がない。助けて欲しい。

良 それは出来ないですよ。

佐々木 そうか。やっぱり無駄だったか。

佐々木、ゆつくりと頭を上げる。

佐々木 まあ、飲もうか。

良 ええ。

八 計算課

山村 佐々木さん、青田君、一寸来てくれ。

二人立ち上がる。

山村 三人になったなあ。近々、派遣会社から一人短大出の子が入る。可愛い子だよ。それと、佐々木さん、来月から、箱がもう一つ来る。青田君の仕事を担当して欲しい。

佐々木　私が箱を……。

良　大丈夫ですよ。僕もプログラムなんか知らないんですから。

佐々木が帰ろうとする。山村が呼び止める。

山村　佐々木さん、頼みがあるんだ。

佐々木が振り返る。

山村　短期間だったんで、送別会も出来なかった。

出来るかぎり前の連中を集めて欲しいんだ。一言みんなに謝りたい。酒を飲んで気持ちよくサヨナラを言いたいんだ。あんたとは長いつき合いだから、分かってくれるよなあ俺の気持。

計算課が暗転。

九　送別会

岡本、山田、山村、佐々木、良が座っている。

岡本 半日休暇を取って来たよ。

佐々木 それはご苦労さん。

岡本 佐々木さんが発起人じゃ断れませんかよ。

佐々木 ありがとう。滋賀県はどうだね。

岡本 売り子やってるんですよ。今日は安いよ、安

いよ。なんてね。慣れない仕事は辛いですよ。

佐々木 そうか。残るも地獄、行くも地獄か。

岡本 まあ、食べるためにはね。山田さんは、ど

う？

山田 専業主婦。算盤弾いて家計簿をつけてるわ。

岡本 家庭には箱は来ないか。

山村、立ち上がる。

山村 みんなの元気そうな顔を見て、これほど嬉し

いことはない。上司として、一言謝りたかった。

すまん。この一言しか俺にはない。

山村、深く頭を下げる。

岡本 課長のせいじゃないよ。

一拍置いて1つだけ、山田が拍手する。ぱらぱらと拍手が起きる。酒をついで回る山村。談笑する。

山村 同士だからな俺達は。

岡本 同士ですよ俺達は。

山田 美人の同士もいますよ。

山村 ますます美人に磨きがかかった。

山田 青田君、相変わらず静かねえ。

岡本 歌でもやったらどうだ。

拍手が起きる。

良 歌はどうも。

山村 なんでもいいんだよ。

山田 みなさん、青田君が歌います。

拍手。立ち上がる良。

良 貴様と俺とは同期の桜。

部屋が静まりかえる。

岡本 お前の同期は箱じゃないか。

良 同じ航空隊の庭に咲く。

襖を激しく開けて、関が入ってくる。

関 (酒のために舌がもつれている) いや、みんな遅れて悪い。お通夜みたいだろうと思っていたのに、意外に賑やか、結構、結構。

よろめきながら、良の前にやってくる。

関 いや、青田が、青田さんが歌うなんて初めて聞いた。

岡本 関さんご機嫌だなあ。

関 機械、飲め。機械にも油が必要だろう。

笑いが起きる。

関 (手を打つ) そうだ、俺達は口から飲むが、機械は何処から飲むんだ。

山村 小便でも行くか。

山村が部屋を出る。

岡本 そうだもつと下だよなあ。

良 やめてください。

関 機械が喋るな。

山田 (笑いながら) そんな、かわいそうよ。

岡本が良を羽交い締めにする。後ろに倒される良。

関が良のバンドを外す。暗転。

山田 (笑いながら) いやだあ。

良 足を離して下さい。

関 おっ、かわいらしい口をしとるなあ。たっぷり油をやる。

良 関さん、やめてください。

岡本 機械が喋るな。

良 誰だろう？ 足を押さえているのは。ほんの数分のことだったかも知れない。だが、何時間も彼等の前に下半身を曝していたように思われた。

佐々木 もうやめてやってくれ。

良 三方からかかっていた力がすーと抜けた。

照明。良、急いで体を起こし、手で前を隠しながら、ズボンを上げる。関を睨む良。

関 なんだよその目は。

岡本 箱が怒るのかよ。

佐々木 もうやめよう。な、な。

佐々木が、散らかったものを集める。良が部屋を飛び出す。暗転。

拾 路上

下手に、久美子が立っている。

久美子 青田君…。

良 山瀬さん…。

久美子 お店へ行ったの。そうしたら、帰ったって。

いやな予感がしたの。

良 大丈夫。もう、終わった。

久美子 探してたの。会えるまで探そうって。何が

あったの。

良 何もない。

久美子 私のアパート、近いの。寄っていかない。

良 いいよ。

久美子 猫町^{ねこまち}でお酒を買おうよ。

良 猫町？

久美子 会社の窓から見えるでしょ、この町。私はこの町を歩いて会社に来ているの。町内に猫がたぐさいる。だから、私がつけたの、猫町って。

良、笑う。

良 君がつけたの。

久美子 よかった。

良 えっ。

久美子 笑ってくれたから。お酒、買ってくるね。

良 いいよ僕が行く。

久美子 いいの、いいの。ビールで乾杯しよう

久美子、下手に消える。猫のなきごえ。良、上手
を振り返る。

暗転。

拾壺 久美子のマンション

久美子がビールを注ぐ。

久美子 もう、何があったのか言わなくていい。言
わないで。良は悪くないんだから。飲もう。

良 ありがとう。

久美子 ありがとうも、もういい。

良 素敵なマンションだね。

久美子 広すぎるの。一人じゃ。

良 えっ。

久美子 何でもない。

拾式 計算課

上手から、アーキシステム社員の社員A、Bが
段ボールを台車に乗せて運んでくる。

社員B 何処に置きますか？

佐々木 (嬉々として) 窓側の机ね。

社員B もう一つ荷物がありますんで。

社員A が台車押して上手から現れる。

社員A ここまで運んできてやったんだ。いい加減
に出て来いよ。(笑いながら) 吉田が中にあるん

です。会社からずっと箱に入ってきたんです。

吉田が箱の中から出てくる。

吉田 安部公房の「箱男」のように、箱の中で哲学を考えているのではないのです。逆に箱の中にいると何も考えることが出来なくなる。私は運ばれる荷物になる。私の中の時間がなくなる。

社員Bがコンピューターのセッティングをする。
社員Aと吉田がボクシングのまねを始める。スロ
ーモーション。吉田がゆっくりと、ゆっくりと倒
れる。這いながら、箱の中に入る。男二人が、箱
を持ち上げる。台車に乗せて上手に消える。箱が
消えていった方を見つめる良。箱は一度だけ大き
く揺れる。

佐々木 冗談が多いね、あの人。

良 あの人の中で何かが進行している。

山村 あんな連中には、変わり者が多いんだろう。

しかし、山師じゃなかったなあ。システムは作っ
た。

三人が退場する。

拾参 計算課

誰もいない部屋に佐々木が入ってくる。

佐々木 （元気よく）おはよう。

布でコンピューターを丁寧に拭き始める。椅子に
腰掛ける。コンピューターに話しかける。

佐々木 おはよう。今日一日頼むよ。さあ、一緒に
始めよう。

人差し指一本でキーを押し始める。

佐々木 お利口さんだ。もう少し働いておくれ。次

の計算は少し難しいけど、君なら平気だ。ほれ、この数字は大切に置いておくんだ。後で使うからね。

いつの間にか、良、女子社員、山村が出社してきている。仕事をする三人。女子社員が電話を取る。山村が良を呼び話をしている。佐々木の席にだけライトが当たる。右手の人差し指が震え始める。それを左の手で押さえつけようとする佐々木。左手で押さえながら、キーを押す。佐々木に当たっていたライトは消える。佐々木ゆつくり席を立ち、朝と同様に、布でコンピューターを丁寧に拭き始める。暗転。

拾四 計算課

プリンターから出た用紙が、床一面に広がっている。モニターは次々に記号付きの数字が流れている。部屋の真ん中に佐々木が立っている。良が下手から現れる。

良 おはよう。

女子社員 青田さん、あれ。

良 佐々木さん。

佐々木 一晩よく頑張ったねえ。素直で、文句一つ
言わない。こんない子はいないよ。

良、用紙を手に取る。

良 永遠に終わらない仕事。無限ループか。

舞台下手に箱が現れる。佐々木が中に入る。ネク
タイを取る。眠り始める。突然目を覚まし、時計
を見る。ネクタイを締める。

暗転。

拾五 割烹

佐々木 家のローンもあるし、子供はまだ学生なの

でねえ。又、働かなきゃならないが、それは先のことにするよ。三十五年間働いて、やっと手に入れた休暇だからね。

良 長い間、ご苦労様でした。

佐々木 人生って、つまらんなあ。いつも何かに怯えて、逃げ回っているうちにドンドン年をとる。

佐々木がビールを飲む。

佐々木 君とももう会うことはないなあ。

良 時々、顔を見せてくださいよ。

佐々木 もう一本もらおうか。俺は酒にするよ

板前（声） お銚子一本。

佐々木 君に一つだけ言っておかなければならないことがある。

佐々木がビールのコップを置く。

佐々木 あの時、足を押さえていたのは岡本君でも、山田さんでもない。（間）私なんだ。知っていた

の。

良　いいえ。佐々木さんだとは思わなかった。

佐々木　恨むよね。

良　もう、忘れました。(間)海老のおどりを頼みましよう。この前奢ってもらった時、これほど旨いものが世の中にあっただのかと思いましたよ。

(笑う) 大げさですか。

佐々木　いいや、(笑う) 実は、俺も食ったことがなかったんだ。

二人が立ち上がって下手に歩き出す。

佐々木　(身を縮める) 寒いね。また、冬が来る。

二人、上手から下手に数歩、歩く。佐々木、立ち止まる。

佐々木　あれは何だろう？

良　焚き火ですねえ。

佐々木　会社の窓から見える場所だね。

良　　そうです、猫町。

佐々木　猫町？

良　　いや、まあ。

佐々木　焚き火か。酒を飲んでいる。

良　　石を投げている人もいますね。

佐々木　あぶないね。

男1（声）　一杯どうだね。

佐々木　私に？

女1（声）　あんたら以外に誰もいないよ。

男2（声）　明日から、このあたりがみんな解体されるんだ。
れるんだ。

女2（声）　だから、お別れ会。

男1（声）　どっちみち潰されるんだったら、俺達
で叩きつぶす。

佐々木　あつ、どうも。

佐々木が酒を飲む。

男1（声）　あんたも石を投げなよ。すつとするぜ。

良が、投手のようにゆっくりと振りかぶって石を投げる。ガラスが割れる音。佐々木も石を投げる。

男2（声） ビルが建つんだ、超高層ビル。

女1（声）（泣く）私たちの街が消える。

老人（声） 生まれてからずっと住んでたんだよ。

80年。

女2（声） ひどいね。

男2（声） 何もかもコンクリートで塗り込めてさ。

老人（声） 人が住んでいた町が消える。

男1（声） おっ、月が見えるぜ。

女1（声） 満月よ。

男2（声） あんな月はもう見られないぜ。

男1（声）（歌う） 月が出た 月が出た。

女1（声）（歌う） ビルの谷間に月が出た。踊ろ。

良 踊れないよ。

女1（声） 何でもいいのよ。こうやって、こうや

って。

二人踊り始める。

佐々木　今まで一度も踊ったことなんかないよな。

　　気持のいいもんだ。

良　　そうですね。

　　佐々木と良が踊る。

男2（声）（叫ぶ）火がついたぞ。

　　踊りが止まる。二人は空を見上げる。

佐々木　きれいだなあ。

　　暗転。

拾六　専務室

山村と良、下手から現れる。山村、ドアをノックする。

専務 どうぞ。

二人、入る。中に吉田と専務がいる。一瞬、吉田に驚く良。彼は紺の背広をきっちり到着こなし、襟につけた社章をさりげなく良に見せる。かしこまって二人、礼をする。

専務 いや、ご苦労さん。それでは、辞令を渡しませう。山村課長。

山村が一步前に出る。

専務 地区ブロック課長。職名は変わりましたが、前の部長です。昇進おめでとう。がんばって下さい。

専務、山村に辞令を渡す。

専務 青田君。

青田、一步前が出る。

専務 システム化に貢献したよね。(笑う) 私はまだ算盤だけどね。人事課課長をお願いする。

専務、良に辞令を渡す。3人が揃って拍手する。

専務 わが社も、本格的なシステム部を持つことになった。そこで、システム部長として吉田君に来てもらうことになった。

吉田、さかんに照れる。専務、吉田に辞令を渡す。

3人が揃って拍手する。

専務 リストラと言うと人員整理というマイナスのイメージで使われるけど、本当の意味はそうじゃない。リストラクチャリングは企業再構築、言葉を換えると経営革新なんだ。それを担うのは君たちだ。頑張ってくれ。山村君は残って、話がある。

3人揃って礼をする。良と吉田が部屋を出る。二人、肩を並べて歩きながら。

吉田 コーヒーでもいかがですか。どこかないかなあ。

良 一階に喫茶店がありますよ。

下手のテーブルに、良と吉田が向かい合って腰掛ける。吉田が襟の社章を見る。

吉田 これ何のマークかなあ？

良 光という字をデザインしてあるんですよ。

良も吉田にならって、襟の社章を見る。

吉田 なんていう会社でしたっけ？

良 (笑う) 光物産ですよ。

吉田 会社の名前も知らない社員か。あらためて、青田さん、昇進、おめでとうございます。

良 人事課ですか。初めて聞きました。

吉田 人事課のシステムもほとんど出来ていますよ。

良 そうですか。じゃ、何をするんだろう。

吉田 私に聞いても知りませんよ。そんな質問、よしだ。

良 (笑う) でも、驚きました。吉田さんと同じ会社になるなんて。

吉田 飼いだになっちまったんです。

良 ……。

吉田 まあ、前の会社に比べて安定はしました。

ウェイトレス(声) お待たせしました。

良 (ふと) やはり算盤だと思う。

吉田 算盤？

良 算盤の音が消えた。その日から、何かが変わった。こわれた。

吉田 貴方は使い走りだったんですよ。貴方は連中に勝ったんですよ。

良 勝った？ そんなこと考えたこともありません。

吉田 でも、人間には機械よりももっと素晴らしいものがあると思いますよ。愛とか夢とか機械には出来ないものが。酒にも酔える。

良 死ぬのも

吉田 煙草、いいですか？

良 ええ。

吉田 40才になって、煙草、始めちゃった。本当はやめる頃ですよねえ。

吉田、煙草の火を付ける。

良 何故生きているのか分からないんですよ。

吉田、煙草の煙をため息のように吐く。

良 愛ですか。人を思いやる心ですか。私は利己主義です。自分が安全なら、他人がどうなったってかまわない。なのに、いつも善人ぶっている。自分の名刺が汚れないことだけを考えている。

吉田、煙草を灰皿において、コーヒーを一口飲む。

吉田 青田さんは結婚はまだですね。私は子供が二

人。それが飼い犬になっちまった理由ですよ。つ
まらないですか。

良 いいえ、羨ましいですよ。

二人黙る。(間)。二人、立ち上がり、上手に歩
き出す。

吉田 今度、機会があれば飲みに行きましよう。難
しい話は抜きで、あなたとゆつくり飲みたい。

良 いつでも電話して下さい。

吉田 電話しますよ。

良 機械が喋るのはどうなりましたか？

吉田 そんなこと言ってましたねえ。前の会社にお
いたままだ。完成まであと一歩なんです。自分
の声を分析して、結局は自分の声にしましたよ。

良 声もデジタルですか。

吉田 アナログですよ。突き詰めればデジタルにな
る。そうじゃないですか。人間の声も突きつめれ
ば所詮、波ですよ。でも、あの箱の中が無性に懐
かしいですよ。あそこには自分しかいなかった。

他人は誰もいなかった。自分を感じることが出来た。

肩を並べて歩く。下手端で止まる。

良 エレベーターに乗らないんですか。

吉田 箱は苦手なんですよ。

エレベーターのドアが開く。良、乗り込む。吉田は片手を上げて別れの会釈をする。ドアが閉まる瞬間。吉田が叫ぶ。

吉田 嘘なんだ。(叫ぶ)全部嘘なんだ。

暗転。

拾七 人事課

電話の音。

女性社員（声） ハイ、光物産、人事課です。青田
ですか、少々お待ち下さい。課長、アークシステ
ム様からお電話です。

良 アークシシステム？ ハイ、代わりました。え
っ、吉田さんが。すぐに行きます。

電話を切って、駆け出す。

暗転。

拾八 アークシシステムオフィス

下手から良。上手に箱がある。良が走る。

社員B どうも、ご足労をかけました。まだ警察に
知らせてないんですよ。

良 歩いて5分。走って1分ですよ。

社員A どうしよう、119かな。だけど、朝、来
た時、冷たくなっていたから。テレビなんかじゃ、
死んでいる時は、110番だよ。

良 家族の人には。

社員 B まだなんです。家は福井ですから。

良 結婚されてたんじゃ。

社員 A 独身ですよ。ずっと。

良 (間)。あそこですか。

社員 B ええ、箱の中です。あんな狭い所で首を括るの大変だったでしょう。昨日の夜から来ていたらしいんです。管理人が、吉田さん来ているよつて。何をしてたんだろう？

社員 A 会社を出て行った人が、死にに帰ってくるなんてねえ。まあ、辞めちまった人だから。

社員 B あの箱を早く片づけりやよかったですね。

社員 A 機械は自殺できないなんて、変なことを言い出しましてね。その時に気づけばよかった。結局、自分で電源を切っちゃまった。

社員 B が電話をかける。良、床に落ちている、糸電話を拾い上げる。

良 結局、貴方のことは何にも知らなかった。

糸電話を口元にあてる。

良 もし、もし。

糸電話を耳にあてる。

良 そこにいるんでしょ。もし、もし。

社員B 最初にあなたに知らせました。

良 どうして僕に。

社員A メッセージがありました。あなたの名前と

電話番号。それと……。彼が来たら、キーを叩け
って。

良 キーを……。

社員Aがメモを見ながらキーボードを叩く。

吉田の声 こんにちは、青田さん、聞こえるかい。

「デイジー・ベル」を歌います。照れくさいけれどね。

Daisy, Daisy

Give me your answer do

I'm half crazy all for the love of you

It won't be a stylish marriage

I can't afford a carriage

But you'll look sweet upon the seat

Of a bicycle built for two

社員 A こんな歌、知らないなあ。

社員 B も首を振る。

良 Daisy, Daisy

Give me your answer do

I'm half crazy all for the love of you

社員、驚いて、良をみる。良、静かに糸電話を机の上に置く。

暗転。

中央横向きに机。その前に良が腰掛けている。

良 会社としましても、全く申し訳なく思っています。全て私どもの責任です。ええ、（頷く）おっしゃる通りでございます。誠に申し訳ありません。次のかた。えっ、終わりか……。今日は何人だったかなあ。疲れたなあ。

肩を叩く。

良 みんな言うことが同じだなあ。言う方も同じか。段々相手の顔が区別出来なくなる。みんなおんなじ顔に見える。こんな仕事、コンピューターにまかせろよな。コンピューターなら疲れることもないだろうし。そうだろ、君。（間）。庶務課と兼任だから今日はいないか……。

机の上の書類を片付ける。書類を鞆に入れる。

立ち上がる。下手に向かって歩き出す。下手にマ
ンション。

式拾 マンション

ドアを開ける。

久美子 お帰り。

良 只今。

久美子 お風呂？ お食事？

良 どちらもいいよ。眠りたい。

久美子、エプロンを外す。食卓に腰を下ろす。良

はネクタイに手をかける。

久美子 今日、お医者さんに行ったの。

良 風邪をひいたの。

久美子 違う。産婦人科。

良、ネクタイの手を止める。久美子の前に腰掛ける。

良 計算が違っていたのかなあ。

二人見つ合う。良が目を反らす。

久美子 良！ 良、何処にいるの。

良 君の前にいるよ。

久美子 見えない。あなたが見えなくなった。

久美子 立ち上がる。背を向ける。激しく泣く。

良 結婚しようか。

久美子 結婚？ 無理だと思う。もう、これ以上壊れたくないの。

久美子が着替えている。手に虫籠を持っている。

良 そんなのまだ、持っていたの。

久美子 まだ、光っているよ。（お腹を押さえる）。

良、机に顔を伏せてすすり泣く。

良 僕はとつくに壊れているんだ。子供が出来たつて聞いても、人ごとみたいに聞こえる。

久美子 泣いてもいいよ。

良 ごめんね。

久美子 うん。楽しかったよ。縁日、ホタル。小さな小さな命。ありがとう、良。

久美子、立ち上がる。

久美子 それじゃ、私、行くね。

良 僕が出て行くよ。そうすべきだと思う。

良が出て行く。久美子、虫籠を目の高さに上げる。

久美子 光った。

ホタルの光が行き交い、やがて、消える。

暗転。

式拾壺 人事課

舞台中央に良の机。書類が一枚のっている。良が入ってくる。

良 随分、仕事が減ったなあ。今日は一人か。昨日も、今日も、明日も、おんなじ日の繰り返し。

椅子に腰をかけて、書類を手に取る。

良 青田良殿。俺じゃないか。嘘だろう。（辞令を見直す）計算課……。まだあったのか。

良、電話をかける。相手が出る。

庶務の女（声） はい、庶務課です。

良 人事課の青山です。計算課への辞令を受けたの
ですが？

庶務の女（声） はい、お持ちしました。

良 計算課は前の場所でいいのかなあ。

庶務の女（声） いいえ、本社の三十一階に移転
しています。

良 本社って。

庶務の女（声） （驚く）えっ、本社ですよ。ご存知
ないんですか。人事課の窓から見えると思います
が。

良、窓を見る。

良 あれか……。

庶務の女（声） よろしうございますか？

良 分かった。あっ、ちよつと待って。

庶務の女（声） はい。

良 人事課はどうなるの？

庶務の女 庶務に統合されます。（あきれ）それ
もご存知ないのですか。

良 （曖昧に答える） いや。ありがとう。

受話器を置く。

式拾弐 本社

良、上手から現れる。

良 誰もいない。迷路みたいだ。

良、下手に消える。また、上手から現れる。

良 （笑う） 迷子だなあ。エレベーターは三十一階で降りた。それは間違いない。エレベーターに戻るうとしても同じところに帰ってきてしまう。

うろつく。

良 誰かいないかなあ。ドアは一杯あるけど、暗証番号がいるみたいだ。仕事で邪魔をしてはいけな

いし。

良、下手に消える。また、上手から現れる。躊躇するが、思い切って、ドアを叩く。

良 すいません。ちょっと、お聞きします。

答えはない。数回叩いて、振り上げた手をとめる。ドアのネームを読む。

良 ここか……。

暗転。

式拾参 計算課

机が一つある。女性（アンドロイド）が腰掛けている。前に椅子。机の上に算盤がある。良が椅子に腰掛ける。

良 私は算盤が出来ない。

女性 それならお教えいたします。一から五まで入
れられますか？

良 それぐらいは。

女性 願いましては一円也、二円也、三円也。

良 ちよつと待って。

女性 分かりました。

良 (算盤を振る) これはなんの真似だ！。

女性 質問が解析出来ません。

良 用済みなら、用済みって言えよ。

女性 質問が解析出来ません。

良 君は……。

女性 アンドロイドです。名前はHAL 9000。

良 映画の二〇〇一年宇宙の旅のHAL 9000。ふざけ
るな！

女性 ふざけてはいません。名前をお聞きになった
のでお答えしました。二〇〇一年宇宙の旅は監

督・脚本はスタンリー・キューブリック。1968年

4月6日にアメリカで初公開されました。SF映画の
傑作と言われています。

良 それじゃ、「デイジー」を歌ってくれ。父さんがいつも歌っていたよ。僕の子守歌なんだ。

女性 承知いたしました。

Daisy, Daisy

Give me your answer do

I'm half crazy all for the love of you

It won't be a stylish marriage

I can't afford a carriage

But you'll look sweet upon the seat

Of a bicycle built for two

良 ありがとう。父さんは公務員だった。こんな話はいいか。

女性 大丈夫です。時間は無制限ですよ。

良 目立たない人だった。定年まで律義に勤めて、辞めてすぐ癌にかかって死んだ。父さんの楽しみは、レンタルビデオだった。部屋の隅に自分専用の小さなテレビを置いて、見ていたよ。特にお気に入りには、『2001年宇宙の旅』。僕も横に並んで見たよ。映画は子供に難しかったけれど、歌はい

つの間にか覚えていた。

Daisy, Daisy

Give me your answer do

吉田さんの歌を聞いた時、思い出した。親父が帰ってきたみたいだった。

女性 1962年、ベル研究所にてIBM製のメインフレーム IBM 704 を使った音声合成が行われた時、音声出力装置にボイスレコーダーを使い、「デイジー・ベル」を歌わせました。2001年宇宙の旅では、機長に分解され、機能を喪失しつつあるコンピュータHAL 9000が、デイジー・ベルの一部を歌うシーンがあります。

映画のデータがありますが、お聞きになりますか？ 少し長くなります。

良 やってくれ。時間は無制限。

女性 画面はHALの回路を切る場面です。HALの科白です。

やめてください。お願いですデИБ。やめてください。恐ろしい。怖いよ、デИБ。論理記憶端末。理性を失いつつある。分るんだ。感じる。もうろ

うとしてきた。それは間違いない。感じるんだ。
感じる。感じるんだ。私は……怖い。怖いねん。

良 突然、関西弁かよ。

女性 続けまひよか。

良 (笑う) 続けてくれまへんか。

女性 皆さん、こんにちは。私はHAL9000型コンピ
ューターです。イリノイ州アバーナのHAL工場で
生まれました。1992年1月12日でした。教師は
ラングリー先生。歌うことも教わりました。お望
みなら、お聞かせします。

良 聞きたいな。歌ってくれ。

女性 曲は、デイジーです。

Daisy, Daisy

Give me your answer do

I'm half crazy all for the love of you

It won't be a stylish marriage

I can't afford a carriage

But you'll look sweet upon the seat

Of a bicycle built for two

デイジー、デイジー

どうか答えておくれ

僕は気が狂いそうなほど、きみへの恋に夢中

お洒落な結婚式にはならないかもしれない

馬車をしたてるお金はないからね

でも君はきつと素敵だろう

二人乗りの自転車に乗るその姿は

デイジーよ、デイジー、

答えをおくれ、ねえ！

僕は半分狂いそうさ

君への愛で！

かっこいい結婚じゃないかもしれない、

僕には四輪馬車なんて買えないから、

でもきつと可愛いと思うよ

二人乗りの自転車に乗った君は！

途中から、良も歌う。

良　　ありがとう、楽しかった。算盤をつづけるよ。
女性　分かりました。では、ご破算で、願いました
　　は一円也、二円也、三円也。

女性の姿が消える。

良　　僕がここで算盤を弾いているなんて誰も思っ
　　ていないだろうなあ。

算盤を振る。

良　　いい音だ。久美子……。どうしているんだろう。
　　子供はいくつになったんだろう。自分の子供の年
　　を忘れるなんて。

算盤を何回も振る。肩を算盤で叩く。計算課はフ
　　ェードアウト。久美子が上手から現れる。

久美子　どうもありがとうございました。

職員（声） 遥^{はるか}ちゃん、お母さんのお迎えよ。

久美子 さあ、帰ろう。

下手に歩く。

久美子 今日はどんなお遊びをしたの？ お絵かき

ね。誰と？ ふーん、慶^{けい}君か。

足を止める。空を見上げる。

久美子 遥^{はるか}ちゃん、パパはあそこにいるのよ。

久美子、歩き出す。

久美子 猫もいなくなったなあ。

式拾四 計算課

読み上げ算の桁数が増えて、読み上げのスピードが増す。

女性 16600円也、3754円也、8565円

也、では。

良 85670円。

女性 御明算。これで終わりです。

良 ちょっと、待って。これって、何の役に立つの？

女性 多分、何かの。

良 不確かな答えだね。

女性 不確かです。分かりません。(にっこり笑う)。辞令が出ています。忘れてました。

良 忘れていた……。君は少し変わったね。

女性 私は変わりませんよ。変わったのは貴方では。

良 分かった。

女性 プリントアウトします。

良 君が読んで。

女性 分かりました。辞令、青田良殿、貴方を解雇します。手続きは庶務の方で処理済みです。お忘れ物のないように。特に、ロッカー、抽斗の中は気をつけて下さい。

良 分かった。でも、何もないよ。

良、立ち上がる。

女性 算盤は、お持ちになっても結構ですよ。

良 いいよ。ありがとう。

女性 お元気で。さようなら。

暗転。下手のドアを開ける。久美子が上手から入ってくる。二人が立ち止まる。

音楽。

幕